

現代語譯
幼學綱要

特 257

771



始



特257
771



現代語

幼

譯

學

綱

要

侍講 元田永孚謹撰
教材社編輯部謹譯

東京教材社發行



第一 孝
第二 忠
第三 和
第四 友
第五 信
第六 勤
第七 立
第八 誠
第九 仁
第十 禮

行 節 順 愛 義 學 志 實 愛 讓

一
九
三
二
〇
八
六
四
二
七

第十一	儉	素	八三
第十二	忍	耐	九〇
第十三	貞	操	九七
第十四	廉	潔	一〇四
第十五	敏	智	一〇九
第十六	剛	勇	一一六
第十七	公	平	一二六
第十八	度	量	一三六
第十九	識	斷	一四一
第二十	勉	職	一四六

第一 孝行

天地の間、父母の無い人はない。其の初め胎を受けて生れ、成長するまで、其の恩愛教養の深い、父母にまざるものはない。それ故よく其の恩を思ひ、其の身をうつしみ、其の力をつくして、父母に事へ、其の敬愛をつくすのが、子たるものの道である。故に孝行を以て、人間の最大の義とするのである。

孝經に曰く、夫れ孝は徳の本なり、教のよつて生ずるところなり。

曰く、身體髮膚之を父母に受く。敢へて毀傷せざるは孝の始めなり、身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯はすは孝の終りなり。

禮に曰く、凡そ人の子の禮たる、冬は温かにして、夏は清しくす、昏に定めて、
而して晨に省す。醜夷にありて争はず。

論語に曰く、其の人と爲り、孝悌にして、上を犯すことを好むものは鮮し。上を
犯すことを好まずして、亂を作すことを好むものは、未だ之れ有らざるなり。君子
は本を務む。本立ちて、而して、道生ず。孝悌は、それ仁を爲すの本か。

大學に曰く、人の子と爲りては、孝に止まり、人の父と爲りては慈に止まる。

一、神武天皇

神武天皇の元年春。正月一日に、天皇は澤山の命や臣達をおつれになつて、大和の橿原宮に、
初めて天皇の御位にお即きになり、そして正しくお妃をお迎へ遊ばされ皇后となられた。

即位の式を行ふためには、櫛を立てて祭りの場所を定め、この國をつくるために盡された先祖
の八つの神様をお祭りして、この國のいつまでも安らかなれとお祈りになつた。その時、天富
命が、齊部といふ種々の祭りの役をする方々をお連れになつて、天祖より傳はつた三種の神器を
八神に捧げて、正殿にお祭りになつた。

かうして國の土臺をしつかりと、おつくりになつたので、天皇は天種子命と、天富命に御命
令になり、神様をお祭りすることや、國の政治をおとらせになつた。

天皇は即位後、四年の春、二月甲申、人民に次のやうなことをおほせられた。

「わが皇祖の靈は、天より降り、朕が躬をお助けになる。今や、敵はみな平ぎ、國內が平和にな
つた。すべからく天神をお祀りして、親につかへる道をつくさう。」
と、そこで、鳥見の山といふところに、靈時をつくり、天照大神をお祭りになつた。

二、仁明天皇

仁明天皇の嘉祥三年のこと、天皇には、冷泉院れいぜんいんにおいてなされる太皇太后の御機嫌ごけんうかがひに
いでのなつたが、その時、太皇太后のおことばにしたがひ、階段の下から、みくるまに乗つてお
かへりあそばされた。それまで、天皇は、太皇太后のところへおいでになるたびに必ず、御徒歩
でおいでになつたが、此の日、太皇太后が、天皇の御輦みくらまにお乗りになるさまを観たいと仰せられ
たので、天皇、左右のものに御相談あそばされると、皆、

「それがよろしうございませう。」

と、お答へ申上げた。そこで、御輦をひいてきたが、天皇には、殿上からすぐにお乗りにならず、
歩いて階段をお下りになり、すつかり下りつくしてから、御輦にお乗りあそばされた。人々はこ
れを見て、

「天皇が、親を敬うやひたまふこと、このやうである。孝は天子より始つて、庶人しよじんに達するといふが、
まことにこのとほりだ。」

と、感きはまつて、泣くものもあつた。

三、美濃國、當耆郡の樵夫

樵夫は、父に仕へて大へん孝行であつた。家が貧乏で、財産がないので、薪を賣つて暮らしを
立ててゐた。父が酒好きなので、樵夫はいつも、ひさごをさげて町に行き、酒を買つて来て、父
にすすめた。ある日のこと、山へ行つて木を採つてゐると、あやまつて石につまづいて倒れた。
その時、ふとどこからか酒の匂ひがして来たので、不思議に思つて、あたりを見ると、石の間か
ら水がわき出し、その色が酒のやうである。ためしにそれをなめて見ると、たいさうよい味で酒
そのままであつた。樵夫は大へんよろこんで、毎日それを汲んで行つては父に飲ませた。靈龜れいき三
年九月、元正天皇は、美濃に行幸なされ、その泉に、養老やうらうと名をつけ、年號を改めて、養老と
なされた。樵夫が、孝行息子と大變おほめに預つたといふことは申すまでもないことである。

四、支那路祖父麻呂兄弟

支那路祖父麻呂は、漆部うるべの役人石勝の子であつた。養老四年に石勝は自分の臣けしんの秦犬麻呂あきのまろと云

ふ者と、役所の漆を盗んだので、捕へられて遠い所へ流されることになつた。その時、祖父麻呂は十二歳、弟の安頭麻呂は九歳、末の乙麻呂は七歳であつた。お父さんが、悪い罪を犯して、遠い所へ流されてしまふので、三人は大變悲しみ、役所へ行つて、役人にお願ひした。「お父さんの石勝は、私達をよく面倒みてくれようとなさつて、つひ漆を盗つたものと思ひます。どうか三人してこれから役所の下ばたらきとなつて、どんな仕事でも致しますから、お父さんの罪を許して下さい」と、涙を流してお願ひしたので、この事をすぐ天子様に申上げると、天子様も大層哀れに思召され、

「人間は誰でも生れると、仁、義、禮、智、信の五つの道を天からうけるけれども、その中で他人になさけをかけてやる仁と、正しいと思つたことをどこまでもやる義とは一番大切です。今祖父麻呂達が、自分をなげ出して、いやしい下男となつて、父の罪を許して貰はうと云ふ心掛けは實に見上げたものである。どんなつらい思ひをしても親のためにがまんすると云ふ心持を考へるとまことに可哀相なもの、三人の願ひをきいてやつたら如何なものか」と、やさしく仰せになつた。

そこで石勝の罪を許し、犬麻呂だけを遠方へ流したが、間もなく役人は、祖父麻呂、安頭麻呂等を免して、父石勝の下へ歸してやつた。

五、橋逸勢の女

橋逸勢の女は、たいへん孝心の深い人であつた。逸勢が罪人となり、伊豆に流されることになつた時、女は非常に悲しみ、父の後を従いて行つた。役人が、之を見つけて叱り、追ひはらふと晝はかくれてをつて、夜になると、また父のあとをついて行つた。遠江まで行つた時、逸勢は病にかかつて死んだ。女はいたく悲しみなげいて、棺を町の外に埋め、そのかたはらに草舎をたてて死んだ父に仕へること、生きてゐた時と同じであつた。

十年一日の如く月日は立ち、其の後、自ら柩を負つてかへり、京都に父を葬つた。

六、常陸國の農民彌作

彌作は、その家が貧しくて田地がないので、人の土地の小作をしてゐた。父は早くなくなり、

母は年老いて、足が利かなかつた。彌作は生れつき愚者であつたが、母によく仕へ大へん孝行で、妻と心を合せて生計を立て、母を養つてゐた。其の中妻が疾にかかり、何をすることも出来なくなつたので、彌作は、このままでは母を養ふことも出来なくなると思ひ、妻と別れて、獨りで母の世話をしてゐた。田に行く時にも、母を獨り家におくことが出来ないで、母を負ひ、農具を抱へて、母のための辨當を持つて行き、夏は涼しいところ、冬は暖いところに母をおき、耕しては行つて見飲食をすすめて慰めた。母が酒好きであつたので、彌作は毎日酒を沽ひ、いつも乏しくないやうにして置いた。延寶の始、領主徳川光圀このことをきき、路すがら彌作の家に入り、兩手に金を盛つて彌作の頭の上に捧げ、其の孝をほめ、之を興へて、

「この金をもつてよく母を養へ。これは予が興へるものではない。天が下さるのである。」
といつた。又、村の役人呼び、

「彌作は生れつき魯鈍であるといふことだ。此の金を人に奪はれるかも知れぬ。其の方ども、よく計つて、田を買はせ、善く監督して世話をして遣はせ。」
と言つた。後、儒臣にいひつけて、彌作の傳を作らせた。

第二 忠 節

國體の如何に拘らず主權者を戴かない國民はない。君を敬ひ國を愛し誠實業を勵み、以て人としての本分を盡すのは君主、國家に報ゆる道で、これを忠と言ふ。殊に我國にあつては上に萬世一系の君を戴き、君臣の關係永久不變であるから忠即ち孝で、併せて人道の最大義とする。

書に曰く、下と爲つて克く忠。

曰く、世、忠貞に篤くして王家に服勞す。

詩に曰く、夙夜、解るに匪ず、以て一人に事ふ。

論語に曰く、君に事へて能く其の身を致す。

曰く、以て六尺の孤を託すべく、以つて百里の命を寄すべし。大節に臨んで奪ふ可からざるや、君子人か、君子人なり。

孝經に曰く、孝を以て君に事ふれば則ち忠。

孟子に曰く、君子の君に仕ふるや、務めて其の君を引き、以て道に當り、仁に志すのみ。

一、大伴部の博麻

博麻は、筑紫の上陽群の軍丁、齊明天皇の七年、百濟を救ふ戦ひに従軍して、唐兵のために

捕へられた。天智天皇の時、土師の富杼、氷の老、筑紫の薩夜麻弓削の元實兒等の四人が、唐にをり、唐人の謀りごとを朝廷に知らせるため、歸國したいと思つたが、歸りの旅費がないので困つてゐた。その時、博麻は、富杼にむかひ、

「私はあなた方と一緒に還ることは出来ない。私の身を賣つて、その金をあなた方にさし上るか、それを旅費にして下さい。」

といつた。富杼等はその言葉にしたがひ、しかし博麻は自分を奴隸に賣つた。その金を富杼等に與へたので、富杼等は日本に還つて、唐の様子を知らせることが出来た。博麻は唐に止ると三十年、持統天皇の四年に、新羅の使、大奈末金高訓等にしたがひ、筑紫に還つた。朝廷では詔を下して、その忠義をほめ、務大肆といふ位を授け、絁四匹、綿十屯、布三十反、稻一千束、水田四町を下され、その家族のもの税金を免除された。

二、和氣清麻呂

清麻呂は、備前の人、孝謙天皇の時、因幡員外介といふ役についた。眞直偽りのなかつた人

であつた。天皇は宇佐神宮を御尊びなされ、何事でも従ひたまはぬことがなかつたが、お氣に入りの僧道鏡が、法王の位につくと、大宰の神主、中臣阿曾麻呂といふもの、道鏡からたのまれて、いつはり奏していふには、

「道鏡を天皇の御位に即かしたならば、天下は太平であると、八幡大神の御教へであります。」と。そこで天皇は親ら清麻呂に命じ、宇佐八幡にゆき、神勅を受けてこいと仰せになつた。出發の時、道鏡は目を瞞らし、劍を撫でて、清麻呂にいふには、

「八幡大神が、わしを天皇の位に即けようとなさるとのことだ。今、御使を請うてきたのは定めし其の爲であらう。お前が宇佐に行つて、神様の教をうけ、わしの思ふところのものを得させたならば、お前を太政大臣となし、國の政治を任せてやる、もしも、わしの言葉に従はなかつたら重い刑にあはせるぞ。」

と、清麻呂は宇佐に行き、まもなく還つてきて、神託のままを奏上した。

「我が國、開闢以來、君臣の分が定まつてゐる。臣を以て君と爲すことは、未だ無い、天津日嗣は必ず天皇の御血筋を立つべきである。横しまなことを考へるものは、すみやかに退けよと、これが一八幡大神の御教へであります。」

道鏡は之をきいて大に怒り、清麻呂の役と位を奪ひ、名を穢麻呂と改めて、大隅國に流し人を遣つて途中で殺させようとしたが、非常な大雷雨が起つて、殺し手が出発しない中に勅使が來て清麻呂を赦した。孝謙天皇がおなくなりになつて、光仁天皇が御位につきたまふ時、道鏡を下野に流し、清麻呂を召し還してもとの位につけられた。後、次第に位が進んで從三位に至り、功田二十町を賜うて、子孫に傳へ、六十七歳で薨り、正三位を贈られたが、嘉永の年、詔して正一位を贈られ、護王大明神の號を賜ひ、明治七年その社、護王神社を別格官幣社に列せられた。

三、菅原道眞

道眞は、醍醐天皇の時右大臣となり、藤原時平と共に政治を執つた。道眞は、徳が高く、學問が深く、一代の人望を負ひ、あつく御信任をうけ、君を格し、善い政治を行ふことを以て自分のつとめとなし、政務を治めて、事をとりさばくこと、水の流れるやうであつた。故に天下の人々

はみなその風采ふうさいをしたつた。時平は、年が若く、まけぬ氣であつたから、道眞に對してまけてゐず、心に不平をいだいてゐた。ある時、宇多法皇が、天皇と御相談なされ、道眞を關白にしようと思召され、このことを道眞にお諭しになつたが、道眞は固くおことはり申し上げて退いた。時平はこれを聞いてますます不愉快に思ひ、つひに道眞を讒言ざんげんして、太宰權師たさいのけんしといふつまらぬ役に落してしまつた。出發の時、道眞は一首の歌を法皇に奉つて、訴へた。

ながれゆく わがみもくづと なりぬとも きみ しがらみと なりてとどめよ
と、つひに謫所たたくにおもむいた。

道眞は五代の天皇につきつき仕へ、中でも宇多天皇にもつとも御信任をうけ、天皇を御たすけして、多大の功があつた。配所に行つてからは、門を閉ちて出ず、文章をもつて慰めとしてゐたが、忠義の心は一日もかはらず、九月十日、詩を作つて、

去年の今夜清涼に待す

秋思詩篇獨り勝を斷つ

恩賜の御衣今此に在り

捧持して毎日餘香を拜す

この詩のことを聞いた人々は、皆涙を流さないものはなかつた。道眞がなくなつて後、延長といふ年に、詔してもとの位に復し、正二位を贈られたが、正暦の年には、正一位太政大臣を贈られた。初め天滿天神といつたが、寛弘の年から、代々皇室から幣を奉られ、明治四年、詔して其社を官幣中社に列せられた。

四、補正成

正成は河内の人である、後醍醐天皇が、北條氏を誅さうとお思ひになり、その謀が漏れて、笠置山かさねに遁れたまうた折、正成を召して、賊を討つ策をお問ひになつた。正成のいふには、
「天誅てんしゅうが加はれば、賊が斃れぬといふことは御座居ません。事をはじめるといふには、謀りごと

が最も大切であります。若し力を以て争つたならば、武蔵、相模の兵は、天下に敵するものが御座居ません。謀を以つてしますれば、之を取ること容易で御座居ます。しかし、戦といふものは、勝つことも、負けることもあると定つてゐるもので、敗れたからといつて、失望するには及びません。私が生きてゐます間は、どうか御心配を遊ばしませんやうに。」

と、申上げ、お別れして還り、赤坂に城を築いた。その備へが未だ出来上らず、兵數もたつた五百ばかりであつたのに、笠置山はすでに陥り、賊はその勢に乗じて赤坂を攻め、その勢は山に満ち、谷を埋める有様であつた。城の小さいのを見て、急に之を攻めたが、正成は戦ふ毎に謀を設けて皆勝つた。そこで賊はゆつくり城を圍んで兵糧攻めにした。城には食糧が乏しく、外からの救援もないので、つひに陥り、正成は金剛山に匿れてしまつた。

元弘二年三月、北條高時は、つひに天皇を隠岐に徙し奉つた。

四月、正成は金剛山を出で、兵五百を以て赤坂を攻め、城將湯淺定佛を降した。此時、護良親王も、吉野の城に兵を擧げられた。三年二月、賊の大兵が千窟城、吉野城を攻め、赤坂先づ陥り、吉野も亦落ちて、賊軍はことごとく千窟城に集つた。その兵數は八十萬といふことであつた。

正成はわづかに千餘人を以て之を拒いだ。この時、新田義貞が起つて鎌倉を滅ぼし、天皇も亦、隠岐を脱け出して伯耆においでになつたので、四方に勤王の師が起り、つひに京都を回復し、千窟城の圍みも解け、天皇には皇居にお還りになつた。正成、兵七千を率ゐて、天皇を兵庫に迎へたてまつつた時、天皇には親しくその骨折りをなぐさめたまひ

「大業の速に成つたのは、みな卿の力である。」

と仰せになつた。正成は、

「陛下の威靈によらなければ、臣はどうして重い圍みの中を出で、陛下をお迎へ申上げることが出来ませうか。」

とお答へ申し上げ、前驅をうけたまはつて、京都に入つた。

延元元年、足利尊氏が反いて、皇居を攻めようとした。正成はたくみな謀計を設けて、之を破つた。尊氏は一旦西海に逃れたが、再び大擧して攻め上つた。正成奏して、

「賊は九州の兵をあつめて來ることありますから、定めし其の勢がはげしいことでありませう。味方の兵は疲れて居りまして、賊に當ることは難いであらうと思はれます。此際、聖駕を比

叡山に移しなされませ。臣は河内に還り、近畿の兵を招き集め、敵の糧道を絶ち、其の疲れたところを計らつて、義貞と共に前後から圍み討てば、賊を滅すことはわけもないことで御座居ます。」

と申上げた。然るに藤原清忠が、この意見に反対し、正成を無理に都の外で決戦せしめようとし、天皇もその言葉に従ひたまうた。正成退いていふには、

「事茲に至つては、もはや仕方がない。」

と、弟正季、子正行と皇居を辭して西に向ひ、櫻井驛に至つた。此時正行の年は十一歳であつたが、これを河内に送り還し戒めていふには、

「お前はまだ幼いけれども、よく父のいふことをおぼえておきなさい。今日の戦は、天下の治まるか治まらぬかの境目であるが、定めしお前を再び見ることはむづかしからう。父が死んだならば、天下は必ず足利氏のものになるにちがひない。お前は慎んでよく、禍と福とを計り、利に迷ひ、義を忘れて、父の忠義をむだにするやうなことをするな。一門のものが、一人でもある限りは、それを率ゐて千廂の城を守り、身を以て國に捧げ、生命を惜むな。お前が父に報ゆる道は、

この外にはないぞ。」

と、嘗て、天皇から下された菊作りの寶刀を、形見にさづけた。正行は涙をはらつて國に還つた。そこで正成は兵庫に至り、手兵七百を率ゐて湊川に陣し、敵の大軍に當り、正季と共に、足利直義の陣に突き入り、七たび遭ひ、七たび分れ、ほとんど直義を殺さうとした時、尊氏が兵を分けて直義を助けに來た。正成兄弟は馬を回して之に當り、血戦十六合、その兵をあらまし失つた。そこで走つて民家に入り、鎧を解いて見ると全身十一個所の創を負うてゐた。正成顧みて正季に向ひ、

「死んで、何をしようと思ふか。」

といふと、正季は笑つて、

「七たび人間と生れて國賊を亡ぼします。」

と答へた。正成もにつこり笑ひ、

「わしも左様思ふぞ。」

と、互に刺しちがへて死んだ。正成時に年四十三歳、正季三十二歳、一族十六人、殘兵五十餘

人皆共に死んだ。天皇にはいたく哀しみたまひ、正三位左近衛中將を贈られた。明治五年、詔して湊川神社を建て、これを祀り、別格官幣社に列し、十三年正一位を贈られた。

第二 和 順

人に男女あつて夫婦があり、夫婦あつて子孫があり、以て一家を成す。夫は外を治め、婦は其の内を修むる者、此の和順調和して一家はよく齊ととのひ、子孫榮えて國家は永久である。かくて人倫は夫婦に始まり、其の道を和順と言ふ。和順はこれを忠孝と並べて人倫の大義とする。

詩に曰く、妻子和合す、琴瑟きんじつを鼓するが如し。
 曰く、琴瑟、御に在り、靜好ならざるは莫なし。

易に曰く、女は位を内に正しうし、男は位を外に正しうす。男女正しきは天地の大義なり。

禮に曰く、禮は夫婦を謹むに始まる。

曰く、和順、中に積みて、英華、外に發る。

曰く、夫婦和するは家の肥なり。

孟子に曰く、男女室に居るは、人の大倫なり。

中庸に曰く、君子の道は、端を夫婦に發す。其の至るに及んでや、天地に察らむ。

一、上毛野形名の妻

第三十四代舒明天皇の時、蝦夷が叛いて朝貢しなかつたので、大仁上毛野形名を將軍として、

蝦夷を討たしめた。味方が敗け、退いて壘に入つたが、蝦夷の爲に更に圍まれ、士卒が多く逃げ散つてしまつた。形名は何とも仕様がなくなつたので、圍を破つて逃げようと決した。形名の妻は、夫にむかひ、

「あなたの御先祖は、萬里海を渡り、威名を外國にまでお擧げになつたと承つてをります。然るにあなたは、御先祖様の御名を辱しめ、後世にまで人に笑はれるようなことをなさるのですか。」といつて、之を止め、形名に酒をすすめた。形名は、酒をのんで、よい氣持になつて寢てしまつた。そこで妻は形名の劍を取り、自分の身につけ、侍女たちにいひつけて、弓弦を鳴らさせると、蝦夷たちはその音をきき、

「官軍がまだ澤山居るらしい、油断はならぬ。」

と、退却しはじめた。その時形名が目をさましたので、妻は武器を執つて之にすすめた。

丁度其の時、一旦逃げ散つた兵士が集まつて來たので、それを集めて蝦夷を討ち、大に之を敗つた。

二、山内一豊の妻

二四

一豊の父盛豊は尾張岩倉の城將織田信安の家老で黒田城にをつた。正親町天皇の弘治三年岩倉の戦に嫡男十郎と共に戦死した時には、一豊は十二歳の少年であつた。ついで主家は同族織田信長に滅ぼされて一豊も浪人の身となつたが、程経て信長に仕へることになつた。

丁度信長の全盛期ともいふべき時で、其の名聲は曉の鐘のやうに四海に轟きわたつて居る時であつた。それ故、其の居城である城下は日本の中心でもあるかのやうに、良主にありつかうとする武士、仕事をさがす技術家、商人、あてのない職をあさる失業者などで大した繁盛であつた。天正九年の事、馬の産地の東國ですら名馬であるといふのを安土に賣りに來た者があつた。

馬は其頃、重要な武器で、戦の勝負は良い馬に乗つた武士の多いか少いかによるのだと考へられる程すべての武士は馬を重要視した。

關東には北條、武田を始め、強大な大名が數あつて、良馬といふ良馬は片つ端からかりあつめ

られてゐたはずなのに、それ程の名馬が遙々安土までひかれて來たのはきつと二つの理由があつたにちがひない。一つは信長のすぐれた馬好きの噂、一つは安土の近頃の景氣好き、つまりここで賣れない馬なら日本中どこへ行つても望みはないといふ商人の考へであつたと思ふ。

馬の噂で織田家の家臣達は磁石に引きつけられる鐵のやうに寄り集つた。もちろん馬は誰が眼にも又とない名馬であつたが何しろ値段が「黄金十兩」と聞いては誰も彼もふりかへりふりかへり引き返すより致方なく、黄金十兩と言へば永樂錢四十貫文と同じで、其頃でも米が約四十八石四斗俵で百二十俵程も買へる金高であつた。

馬商人も仕方なく馬をひいて歸らうとした。一豊家に歸り、獨り溜息をつき、

「貧乏といふものはつらいものだ。自分が君に仕へる始めに、もしもあの名馬を獲て、主君にお目にかかつたならば自分ばかりの名譽ではなからうに。」

といつた。妻が之をきいて、その馬はいくらですかときくと、

「黄金十兩だ。」

と答へた。妻は、

二五

「あなたがどうしても其の馬をほしいと仰せられますなら、妾が都合いたしませう。」

といつて、十兩の黄金を出して、一豊の前に置いた。一豊は、且つ喜び、且つ恨んでいふには「これまで幾たびか、ひどい貧乏をして、お前と一しよに死んでしまはなければならぬかと思つた。それだにお前は、お金をもつてゐるといふことを、少しも口に出さなかつた。よくも我慢してゐたものだ。いつたいどういふわけか。」

妻は答へて、

「あなたの仰せは御尤もで御座居ますが、私のはじめて嫁入つて來ました時、私の父が、この金を親しく鏡箱の底に納め、戒めて申しますには、夫の家が貧しいからとてこの金をむだに使つてはならない。夫の一大事といふ時に用ゐよとのことで御座居ました。聞けば近い中に、京都に馬くらべの式があるさうで御座居ます。あなたが、良い馬を手に入れようとなさるのは、まさに一大事と存じますから、このお金を出したので御座居ます。」

一豊はこれをきいて、

「ありがたい。そなたの恵だ、お父様の御恩だ。」

とよろこび、その馬を買つて自分のものとした。

まもなく、馬くらべの時が來た。一豊は、其の名馬に乗つて、京都へ出た。その馬のかたちはまことにすぐれてをり、たてがみをふるつて、一こゑ高いなないた。信長は望み見て驚き、

「どこからその馬を獲たか。」

と問うた。一豊は、その馬を手に入れたわけを告げた。信長は大に感心し、

「我が家には家來が多いが、一疋の馬を買ふことも出來ない。實に上國の耻である。汝はおちぶれて我が家來となつた者であるのに、よくこのやうな非常なことをなし、我が耻を雪いでくれた。武士たるものの心を用ふることは、汝のやうでなければならぬ。」

と、さらに其の扶持を増し、重く用ゐた。

三、豊臣秀吉の妻

秀吉の妻淺野氏は、尾張の人又左衛門の娘であつた。大層美しく、心がけも立派であつた。前田利家は、若い頃、犬千代といつたが、この娘の美しいことをきいて、妻に娶らうと思ひ、媒酌

に其の旨を含め、父又左衛門に申し込んだ。利家は年若く、家柄がよかつた故、又左衛門は大いに喜び、娘にそのことを告げたが、娘は承知しなかつた。犬千代はそれでも思ひ切れず、妻にしようとした。

此頃、秀吉は木下藤吉郎といつて、織田氏の足輕で、又左衛門の隣に住んでゐた。犬千代と仲が好かつたので、又左衛門は藤吉郎を頼んで犬千代の申込みを断はらせた。藤吉郎は犬千代に、とうとう縁談を止めさせた。犬千代は娘を困らせやうと思ひ、藤吉郎に、娘を嫁に貰へと談判した。藤吉郎は無縁綴で、猿のやうな顔をしてゐる。又左衛門は、事情を娘に話し、

「お前は藤吉郎の所へ嫁くか、それなら事は丸く納るんだ。それに藤吉郎は今こそ卑しい身分だが、後にはきつと出世する男だ。」

といふと、娘はすぐに承知した。

さて婚禮の晩には、破れ疊の上で、缺けた盃を出して、式を挙げた。犬千代は心の中で、

「娘は今仕方なしに式を挙げたのだから、其の中にきつと別れるに相違ない。何んといつてもあの藤吉郎の顔では、早く別れた時の顔が見たい」と待つてゐた。

さうして、毎日様子をうかがつてゐたが、眞に夫婦の仲が好く、氣の合つてゐるところを見て犬千代はつひに愧ぢてあやまつた。

秀吉が、出世して、貴い身分となつてからは、淺野氏を北の政所まんざいといつた。家の中の事は、淺野氏の力によつたことが極めて多く、いつも秀吉を戒めて、

「どうぞ、位の低い貧乏だつた時代をお忘れにならないで下さい。」

といつた。秀吉がなくなつてからは、髪を切つて、秀頼を自分の子供のやうに可愛がり、親族や、諸將たちにも之を輔けさせた。

第四 友 愛

兄弟は一體一支。長少の序、惠順の別こそあれ、相友愛するの情理に至つては、異なることがない。理を思ひ、情を盡し、其の恩義を全くするを、兄弟の道とし、夫婦の和順につぐ友愛を以て人倫の大義とする。

詩に曰く、兄弟既に翕まりて、和樂し且つ湛む。

曰く、兄に宜しく、弟に宜し、令徳、壽豈ならむ。

曰く、彼の岡に陟りて、兄を瞻望す。兄曰く、嗟、予が弟、役に行く。夙夜必らず借にせん。こひねがはくば旃を愼め、猶來りて死すること勿れ。

書に曰く、兄弟に友にして、克く政有るに施す。

論語に曰く、兄弟は怡々。

一、顯宗、仁賢の二帝

第二十三代顯宗天皇は、初め弘計王と申し、仁賢天皇は億計王と申された。共に履中天皇の御孫、市邊押磐皇子の御子で、億計王が兄、弘計王が弟である。雄略天皇が押磐皇子をお殺しなされた時、兄弟の皇子は逃れて播磨の國、赤石郡、縮見の屯の倉の首忍海部の細目の家の召使となり、共に丹波の子供であるといつてゐた。

清寧天皇の御代に、世嗣がなかつたが、播磨の國司、伊與來目小楯、新嘗の供物を徴するため、赤石郡に来て、細目の家で酒宴をした。弘計王は、億計王に對ひ、

「長らくここに逃れ身分を隠して居るが、名をあらはし、貴い身分であることを知らせるには、

今夜のやうなよい折はありますまい。」

と問はれた。億王は心配さうに、

「王子と名乗つて、害をまねくよりは、このまま身を隠して、生命を全うする方がよいではないか。」

と答へられた。すると弘計王は又、

「私たちは、履中天皇の孫なのに、久しく下男となつて苦んで居る。こんなみぢめな事をして生きてゐるなら、いつそ天皇となり、立派な名を顯して死んだ方がましです。」と、互に自分達の不運をなき相いだいて泣いた。億計王は、弟王にむかひ、

「本當にそれはお前でなければ出来ない。どうかお前が天皇になつてくれ。」

と、いはれた。弟王は幾度かことわられたが、億計王が、ぜひにとすすめられたので、弘計王もやむなく決心された。

酒宴の時、細目は二王子に燭の番をさせた。夜もふけ、酒も盛んになつて、家の人たちは、かはるがはる起つて舞つた。舞がすむと、細目は、小楯にむかひ、

「此の二人のあかりをとる様子を見ると、相手に先にとらせ、自分を後にしてゐる。互に尊敬し合つて、自分を後にしようとしてゐる行は、人の道をよく知つた者だ。恐らく並々の者ではあるまい」といひながら、二人の行を更に見ようとして、小楯は絃を弾いて兄弟に舞はせようとした。二人は又互にゆづり合つてゐるので、小楯は、「何故早くせぬか」と叱りつけた。

そこで億計王が先に舞ふと、弘計王は後から立つて兄の舞をほめて舞ひ始めた。そして、「吾は天皇の子孫である」と唱はれたので、小楯は大に驚き、席を離れて再拜し、直ぐに役人に命令して人民を集め、御殿を造つて二王子を迎へ、京都に上つてそのことを奏上した。

天皇も非常におよろこびになり、

「天の神は我を憐んで二王子をお授け下されたのだ」と仰せになり、大臣大連を集めて、御相談の上、二人を宮中に迎へ、億計王は皇太子に、弘計王を皇子とした。

天皇がお崩御なされて後、皇太子億計王は、自ら位に即かれず、位を弘計王に譲られたが、弘計王は固く辭して従はれない。そこで二人の御叔母君である飯豊青皇女が、忍海角刺宮で政を執られた。その叔母君もなくなられたので、役人達の大會議が宮中で開かれた。

すると皇太子は、國璽をとつて、皇子の前に置き、再拜して退き、臣下の席に着かれて申されるに、

「天皇の御位は功ある者が即くべきである。今私がかうしてゐられるのも皆弟の功である。天皇の御位には弟が即くのが當然である。」

と申されると、皇子は固く辭して、

「先帝が御位を兄上に傳へようとして、皇太子となされたのに、其の思召に背くことは出来ません。兄上の爲に計をなしたからとて、功を誇り、弟たるの道に背くことは出来ません。」

皇太子は又、

「先帝が天皇の御位を私に授けようとなされたのは、長男だからである。所が弟は吾が家のためによく働いて、天皇の子孫であることを明かしたため、百官は喜び、人民達も安心したのである。かうして國は固り、萬代の後まで榮えるやうになつた。私は兄でありながら少しも功がない。私の如き者を天皇とする時は、却つて困るに相違ない。天皇の御位を長く空しくすべきではない。弟よ、天皇は國を治めることを第一の目的とする以上、常に民百姓のことを考へねばならな

い。どうか御位に即いて國家のことを計り、人民のためを計つて下さい。」

と、涙を流して申されたので、皇子も兄皇太子の心から國を念ひ弟を思ふまごころに動かされて、とうとう天皇の御位に御即きになつた。これを顯宗天皇と申上げ、この天皇がお崩御になると、次に皇太子であつた兄君の億計王が御位にお即きになつたのである。

二、北條泰時

北條泰時は非常に弟思ひで、深切であつた。かつて評定所に居つた時、敵が弟朝時の家を取圍んでゐるといふ知らせがあつたので、泰時は驚いて、直ちに馳けつけて之を救つた。還つて來ると、平盛綱が諫めていふには、

「あなたは天下の爲に大切な身體ですのに、さう輕々しく事をなされてはよくありません。たとへ朝廷の賊があらはれたといつても、先づ様子をよくお調べになつた上、方法をお考へになつて命令なさるべきであります。其時こそ盛綱等は喜んで働きに参ります。これからもあること、一層御注意なさるやうに」と。

泰時は答へて、

三六

「人と生れて親身ほど大切なものはない。今弟が殺されやうとしてゐるのに、知らぬ顔をして救はずにゐるならば世間の人は何といふだらふ。これ位人の譏を招くことはあるまい。朝時が賊に圍まれたといつても、他人には、大事と思はれぬだらうが、自分にとつては何よりの大事。どうして棄て置けるものか。」

と戒めた。後に朝時はこれを聞いてますます兄泰時を尊敬するやうになつた。

三、毛利氏の諸子

元龜二年六月、毛利元就が病氣の非常に悪くなつたある日、子供達を枕許に呼び、子供の數だけ矢を取り、自らあつめて一束となし、力を入れて折つたが折れない。今度はその中の一本を抜いて折らせると、わけなく折れてしまつた。そこで元就は戒めていふには、

「兄弟は例へばこの箭のやうなもので、仲が好ければ互に強くなるが、仲が悪ければ、必ず失敗する。弱いものである。私の無い後も決してこのことを忘れてはならぬぞ。」と戒めると、二男の

小早川隆景は進んで、

「眞に左様でございます。兄弟仲の悪いのは、必ず欲から起るもので、欲を棄てて、義を思ふならば仲の悪くなるやうなことはございませぬ。」

元就喜んで、

「まことにその通りだ。隆景の言に従ふがよい。」

と、遺言して死んだ。長孫の輝元が後を嗣ぎ、隆景と吉川元春は力を合せて輝元を輔け、父元就の志をついで大敵とも幾度か戦つたが、戦争上手な上に心を一にしてゐたので、勝ち続け、その爲二人が死ぬまで、元就の時から領する山陰山陽の十三ヶ國は尺寸をも失はなかつた。元春は隆景の兄である。

三七

第五 信 義

三八

人の身を立て道を行ふには朋友の輔を須つことが非常に多い。故に良友をもとめ、互に腹心を開き、長短相おぎない、患難相濟ひ、過失あれば直言してこれを戒め、利害中傷によつて相うとんずることなく、終始一貫交りを易へないのが交友の道である。此道を朋友の信義とし、五倫中の一要義として、廣く人に接するの道である。

論語に曰く、朋友と交り、言にして信有らば、未だ學ばずといふといへども、吾れは必ず之を學びたりといはん。

曰く、人の爲に謀りて忠ならざるか、朋友と交りて信ならざるか。

曰く、朋友は之を信にす。

曰く、朋友は切々し憊々。

曰く、人にして信無くば、其の可なるを知らざるなり。大車輓び無く小車軌くわい無くば、其れ何を以て之を行らん哉。

曰く、信、義に近くして、言、復むべきなり。

曰く、民、信無ければ立たず。

曰く、信以て之を成す、君子なるかな。

孟子に曰く、善を責むるは朋友の道なり。

四〇

大學に曰く、國人と交りては信に止まる。

禮に曰く、志を合せて、方を同じうし、道を營みて、術を同じうし、並び立ちては則ち樂み、相下りては厭はず、久しく相見ずして、流言を聞きて信ぜず、其の行ひ、方に本づき、義を立て、同じくして進み同じからずして退く、其の交友、此の如き者有り。

一、上杉謙信

武田信玄は甲斐に住んでゐたので、いつも鹽を東海から買つてゐたのである。が、今川氏眞と北條氏康は相談して、鹽を賣らないで信玄を困らせやうとしたので、甲斐のものは非常に苦しんだ。

越後の上杉謙信は之を聞いて、信玄に次のやうな手紙を送つた。

「聞くところによると、氏眞と氏康は、鹽を送らずあなたを苦しめてゐること、之は眞に武士として愧しいことである。私があなたと争ふのは戰場だけであつて、米や鹽ではない。どうか之から後は、鹽を私の國から必要なだけお取り下さるよう。」
と、謙信は商人に命じて鹽の値段を餘り高くしないで送るやうにさせた。

二、徳川家康

豊臣秀次は秀吉の甥である。秀吉の養子となつて其の關白職をついだが、後年秀吉に疑はれて高野山に逐はれ、つひに死を賜はつた。

其の秀次在職の頃の事である。秀次は諸侯の中で貧しいものを見ると、ひそかに之に金を貸し恩をうり、一方では金もうけをしてゐた。細川忠興も亦黄金二百兩を秀次から借りてゐた。ところが秀次が謀叛の嫌疑をうけて自殺することになると、是等金を借りた人たちにまで罪が及びさうになつて來た。のみならず秀次家の會計係が細川氏に告げて、

「早くお金を返して下さい。そしたら借用證書を破いて捨てませう。さもないと用立てたわけを申し添へて證書を太閤の奉行に差出します。」

といふ通知が来た。忠興が心配して重だつた家來と相談すると、首席家老の松井佐渡守康之進み出て言ふには、

「私は平常徳川内大臣の臣本田正信と親しくしてをります。本多に頼んで、内大臣に相談してもらひませう。あの人は信義に厚い人ですから、知らぬ顔をしてゐる様なことはありません。」と、忠興はその言に従つた。

「しかし私は日頃家康公とは親しいといふわけではないし、こんな事を頼む便りもない。だがお前が正信と交はりが深いといふならお前の心通りにして見るがらう。」

そこで康之は本多正信にすがつて其の窮状を訴へた。

家康は正信の話を聞くと側の人々を遣さけ、あらためて康之を召して今一應其話を聞き取り、正信に命じて二つの唐櫃を開かせた。中にはそれぞれ金百枚があつた。家康、

「唐櫃の上に何と書いてあるか。」

と問ふと正信は、

「これは二十年前に参河においでになつた時、お蔵ひになつたもので御座居ます。」

と答へた。これは家康が三十四歳の時岡崎に居た時のものだつた。

家康は康之に向つて、

「凡て金銭といふものは、夫々出し納れを司る係があつて、たとひ主人と雖もこつそり使用は出来ないものだ。私は久しい間人にも知らせずかうして黄金を貯へて置いたのは、何かしら不時の入用に使はう爲であつた。それが今日はからずも細川殿の爲に役立つといふのは年頃の目的を達したわけでこんな嬉しいことはない。」

と言つて二百兩を手づから康之に渡した。康之は大に喜び、

「おかげで亡びようとする家が亡びずにすみました。この御恩は細川家のつゞく限り忘れはいたしません。早速本國からお金をとり寄せて御返し申すでございませう。」

と、厚く禮を述べた。

家康は、

「いやいやそれには及ばぬ。事が他に漏れては兩家の爲に宜しくない。それ故かうして人の知らない金を取り出して差上げるのだ。康之は非常に感激して、

「急ぎ歸つて主人に忝けない思召を傳へませう。」

と、繰返し禮を述べて辭し去つた。

三、伊井直孝

徳川秀忠は常に行を謹み、一度命令を出したことは、必ず實行するといふ人であつた。鷹狩に出る時、その時刻になると、食事をしてゐても、箸を棄てて出發するので、近臣のものが見かねて、秀忠の食事が済んでから、出發の合圖を報らせるやうにした。

井伊直孝は之を聞き、近臣を責めていつた。

「お前達は未だ君に事へる道を知らない。君の行を道にはづれないやうにさせるのは、臣のつとめではないか。然しお前達は嘘をいつても君に氣に入られようと思つてゐる。その罪は到底許すことは出来ない。一體物のきまりといふものは一度定まれば、たとへ山が崩れやうが、海がさけ

やうが動かす事は出来ない。だから法を守ることは、道を堅く守ることとなるのだ。元々君と民との間は遠く離れてゐる。若しその間にあるお前達が、常に嘘を申して君をあざむいてゐるなら君は悪い事も正しいと思ふやうになつて、その心で政治をお執りになるから民は決して君の命令をきかなくなる。その爲君はますます民を憎み、民も亦君を怨んで、だんだん君と民との間は離れて行く。悪い臣もつけこんで悪事を謀るやうになるものだ。お前達にはこれからもあること、よく氣をつけねばならぬ」と戒めた。

第六 勤 學

人には皆、天賦の徳性がある。然し學ばずして道を知る者はない。先覺に就て學び、道を明め、行を修め、しかして其の徳を成すのである。淺薄な才能を恃んで自己流で事をなすやうでは、徳を傷ひ事を破る。たとひ小技末藝と雖も決して成就しない。故に勤學は、己を成し、物を成す根本の要件である。

中庸に曰く、徳性を尊びて、問學に道る。

曰く、博く之を學び、審かに之を問ひ、慎みて之を思ひ、明らかに之を辨へ、篤く之を行ふ。

曰く、學ばざること有り、之を學びて能くせざれば措かざるなり。問はざること有り、之を問ひて知らざれば措かざるなり。思はざること有り、之を思ひて得ざれば措かざるなり。辨へざること有り、之を辨へて明かにせざれば措かざるなり。行はざること有り、之を行ひて篤くせざれば措かざるなり。人、一たびして之を能くすれば、己、之を百たびし、人、十たびして之を能くすれば、己、之を千たびす。

論語に曰く、學んで時に之を習ふ。亦悦しからずや。

曰く、學んで思はされば則ち罔く、思ふて學ばされば則ち殆し。

曰く、篤く信じて學を好み、死を守つて道を善くす。

曰く、學は及ばざるが如く、猶之を失はんことを恐る。

曰く、吾嘗て終日食はず、終夜寝ねず、以て思ふ、益無し、學ぶに如かざるなり。

曰く、博く學びて篤く志し、切に問ひて近く思ふ。

曰く、仁を好みて學を好まざれば、其の蔽や愚。知を好みて學を好まざれば、其の蔽や蕩。信を好んで學を好まざれば、其の蔽や賊。直を好みて學を好まざれば、其の蔽や絞。勇を好みて學を好まざれば、其の蔽や亂。剛を好みて學を好まざれば、其の蔽や狂。

易に曰く、天行は健。君子以て自ら疆めて息まず。

禮に曰く、僂焉として、日に學々たることあり、斃れて後に已む。

一、後光明天皇

後光明天皇は、英明博學にして、程朱の學を修められ、朝山素人といふ學者を召して、經典の講義を命じ、又、文章に長じてをられたので、藤原肅の文集には、序文をお書きになり、その道の功勞あることをおほめになつた。

二、橘公繼

橘皇后（嵯峨天皇の皇后）は、徳の高いお方で、朝廷にも民間にも御徳をたたへるものが多かつた。仁明天皇の嘉祥三年には弟右大臣氏公と御相談になり、學館院を建て、廣く役人の子弟に學問をおさせになつた。其の頃の人は皇后を漢の鄧皇后のやうに御立派なお方であるとお讃め申してゐた。

氏公の子岑繼は若い頃讀書がきらひであつたので、天皇は、非常にお敷になり、

「岑繼は大臣の孫であり、朕には縁つづきに當るのに、あのやうに書物がきらひでは困つたものだ。」

五〇

と申されたので、之を蔭ながら聞いた岑繼は、非常に畏れ多く、又有難いことに思つて、それから一心に學問に勵み、そして經書や、史書の難かしい本まで読み通したので、後には、中納言といふ位にまでなることが出来た。

三、源義家

義家が、あるとき關白藤原頼通の邸に行き、陸奥の戦のことを話した。その時、大江匡房が、隣室にてその話をきき、

「彼は大将の器量があるが、惜しいことに、未だ兵法を知らない。」

といつた。義家の従者が、物かげでその言葉をきき、腹を立てて、そのことを義家に告げた。義家は、

「あるひは左様かも知れぬ」

といつて、匡房が出るのを待ちうけ、それから匡房について兵法を學んだ。

後に、清原武衡を、金澤の柵に攻めた時、柵から數里離れたところで、雁の列が亂れるのを見て、

「そら、伏兵があるぞ。」

と、兵を従へて探させたところ、果して伏兵がゐたので、これをみな殺しにした。さうして兵士に、

「兵法に、鳥亂るるものは伏なり、とある。自分がもしも兵法を學んでゐなかつたならば危いところであつた。」

といつた。

四、貝原益軒

筑前の人、貝原篤信は、益軒と號し、禮儀正しく、親切な人で、若い頃京都で學問を教へてゐた。その頃の益軒は學問の博いので名高かつた。書物を書くことが好きで年を老つてからいよいよ

よ努め、著はすところ百餘種に及んだ。書物の文字は大抵日本字を用つて、言葉も、丁寧に解り易かつたので、子供や女たちにもよく分つて大變便利であつた。

その著した慎思録と云ふ本の中に、魏の胡昭が八十歳の老人になつても熱心に讀書したことが書いてあるが、

「自分はこんなに年老つたけれど、一日でも一時でも、本を読まねば氣が落ち着かない、かうして本を手から離さずにいれば、どんな本でも解ることと思ふ。」と述べてあるが、之は同時に益軒の心持ちもよく表したものである。

五、荻生徂徠

荻生茂卿は、江戸に生れ、總右衛門といひ、學者となつてからは、徂徠と號した。子供の頃から、非常に賢く、大膽な性質であつた。

父方庵は、醫者で幕府に仕へてゐたが、延寶年中、ある事のため、罪人となつて上總に流された。茂卿は父について行き、十三年の間上總にゐたが、そこは農夫や漁民の家ばかりで、書物も

少く先生とする者もなかつた。本箱の中には、僅かに「大學諺解」といふ大學の書の解釋を書いた書物、一冊ばかりだつたので、茂卿はこの本を読んで研究し、やがて父が教されて、共に江戸に還つてから、その學問がほとんど出來上つた。後、柳澤氏に仕へ、五百石の祿をうけるに至りその學問は、世にぬきんでて、一家の見識を立て、議論も、文章も、一世をうごかすほどであつた。若い時に兵學を研究し、その役目につくにも、儒學を以て仕へたのではなく、兵學を以て仕へたのである。平常、書物を讀んでゐて、夕方になると、軒に出て、軒下でも見えなくなると、やつと室に入つて燈の下で讀むといふやうに、一寸の間でも惜しむ熱心さであつた。ある年の元旦に、弟子の服部元喬が、年賀に行つたところ、茂卿は机によつて、孫子を讀んでゐた。垢だらけの顔に、髪は亂れて長く、まるで正月を知らぬ者のやうであつた。そして、元喬を見ると、さかんに兵法を談じて止めぬので、元喬は新年の挨拶もせず歸つてしまつた。

第七 立 志

五四

凡そ、人が、徳を崇くし、業を成さんとすれば、先づ志を建てようとする。堅忍不退な志操を持たねばならない。此の覺悟を以て精進努力すれば如何なる大望と雖も達成しないといふことはあるまい。若し志が浮泛であつて轉々として成功にあせる者は、種を蒔かず^はに收穫を望むとひとしく、故に、先づ其の目的を定めて其の志を立てて業を建つるのが大本である。

論語に曰く、五十有五にして學に志す。

曰く、道に志し、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ。

曰く、朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。

曰く、士、道に志し、惡衣惡食に恥づるものは、未だ共に議るに足らざるなり。

曰く、三軍も師を奪ふ可し、匹夫も志を奪ふ可からず。

曰く、志士仁人は、生を求めて仁を害ふことなく身を殺して以て仁を成すことあり。

易に曰く、内に難みて、能く其の志を正す。

書に曰く、功の崇きは惟れ志なり。

五五

禮に曰く、身は危くす可きなり、而して、志は奪ふ可からざるなり。起居危しと雖も、意に其の志を信ぶ。

孟子に曰く、彼は丈夫なり、我も丈夫なり、我何ぞ彼を畏れんや。顔淵曰く、舜は何人ぞや、予は何人ぞや、爲すこと有る者は、亦是の如し。

曰く、士は何を事とするか、孟子曰く、志を尙くす。

一、山田長政

長政は、仁左衛門と稱し、伊勢神宮の神主の下男の子といはれ、又、尾張の人であるともいふ。自ら織田信長の子孫であると稱した。少年の頃から大志あり、百姓、商人を好まず、戦争が好きで、豪傑氣取りであつた。あちこちと流浪してとうとう静岡に行つた。元和の始め、長い間亂れ

てゐた天下が漸く定まり、人々が争うて大名に仕へたが、長政は左様いふことを好まず、「こんな狭い國で争つて、名前をあげても仕方がない、自分は海外に出て思ふ存分やるんだ」と志を遠く海外にむけた。

其頃鎖國の令が出なかつた頃であつたから、長崎から商船で臺灣にゆき、さらに西の方印度の暹羅國に行つた。その頃暹羅國は大戦亂があつて、四方の國々がしきりに攻め侵した中に、六昆國がもつとも強かつた。暹羅國王が、兵を出して之を防いだが、その軍隊が極めて不規律なのを見て、長政はひそかに、敗けるだらうと豫言したところ、果してその言つた通りに敗けた。國王はこのことを聞いて不思議に思ひ、長政を呼んで共に語つて見ると、戦争には深い知識を持つてゐたので、王は大變喜んで、長政を將軍として、六昆兵を禦がせた。長政は謀を設け六昆の兵を包みうつた。六昆軍は大敗した。長政はこれを追ひ長驅して都に入り、六昆王を囚にして歸つた。長政の威名が四方に振ひ、それまで叛いてゐた諸國が争うて暹羅と和睦するやうになつた。國王は大に長政を賞し、王女を長政にめあはせ、六昆、匹皮留二ヶ國の地を與へられ、唵普良の名を賜つた。唵普良とは小國王の意である。その後、國王は年をとられて、政治を倦み、長政を攝政

となさつた。

二、熊澤伯繼

伯繼は、叻右衛門と稱し、蕃山と號した。京都の人で、深く中江原（藤樹）の學徳を慕ひ、その家に行つて、學問を教へて貰ひたいと願つたが、藤樹は、自分は人の師となれるやうなものではないからと、ことわつた。伯繼は猶願つて止めなかつた。つひに其の軒下に二夜も坐つてゐたので、原の母はこれを見て、原に、

「この方は、遠い國から來られて、こんなに熱心にお頼みになるのに、ただ知つてゐるところをお傳へするといふことだけなら、して上げてはどうか。好んで人の師となるといふものはあるまゝから。」

と、いはれたので、原は仕方なしに其の言葉を容れた。伯繼はそれから原の教へを受けて、つひに大學者となつて、池田侯に仕へることが出來た。

三、新井白石

新井君美は、白石と號し、江戸の人である。幼い時から賢く、父が土屋侯に仕へてゐたので、自分も共に仕へたが、二十二歳の時、父が侯の怒りを受け、共に追放された。白石志を立て、「男と生れて、封侯となることが出來なければ、死んで閻魔大王とならう。」

と、それから一心に書物を読んだ。富豪河村瑞軒といふ人が、君美の人物を見ぬいて、自分の娘を妻にやらうかといつたが、君美は

「私が今、あなたの世話になりましたは、今迄の苦心も水の泡となります。小蛇の疵は、大蛇となれば大きくなるとか申します。」

と、斷つた。君美の家はますます貧しくなつたが、苦學して懈らず、經史百家の書に通じた。その中堀田侯に仕へ、中ごろ始めて、當時江戸の大學者木下順庵の門に入り、その博學なので名を知られた。その後、堀田侯の所もよして、自由に學問を研究してゐた。徳川幕府は、白石の學徳の高きを知り師とし、從五位下に敘し、筑後守に任ぜられた。政治上のことについて、意見を

申し出たことが甚だ多く、その著書は未完成のものを併せて百六十餘種ある。

六〇

第八 誠 實

誠實は人心の本根である。百行は皆茲から出づるもので、苟も僞詐虚妄に涉るときは、學問才智有りとも雖もこれを恃むに足りない。故に一言一行自ら省みて疚しからざる生涯こそ、人として眞の人たらしむる唯一の道と思はなくてはならない。これ誠實の須臾も離すことの出来ない所以である。

中庸に曰く、誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり。

曰く、誠なれば則ち明なり。明なれば則ち誠なり。

曰く、誠は物の終始。誠ならざれば物無し。是の故に君子は之を誠にするを貴し

六一

と爲す。

六二

論語に曰く、忠信を主とす。

大學に曰く、いはゆる其の意を誠にするとは、自ら欺かざるなり。惡臭を惡むが如くし、好色を好むが如くす。これをこれ自ら謙ふといふ。故に君子は其の獨を慎むなり。

曰く、君子に大道有り、必ず忠信以て之を得、驕泰以て之を失ふ。

易に曰く、邪を閉きて、其の誠を致す。

曰く、辭を修めて、其の誠を立つるは、業に居る所以なり。

孟子曰く、身に反して誠ならば、樂しみ焉より大なるはなし。

曰く、至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざるなり、誠ならずして、未だ能く動く者は有らざるなり。

一、後三條天皇

後三條天皇が、未だ皇太弟であらせられたある日のこと、僧の成尊といふものが、

「殿下には常に北斗星をお拜みになりますか。」

と、問うたことがある。すると殿下は、

「自分は夕に一度は必ず拜む、それは決して自分が天皇になりたいと思ふて祈るのではない。だが、どうかすると、もしも自分が天皇の位に即いたならば、斯うしよう、ああしようといふやうなことを考へることがある。かういふことを考へるのは、不忠な臣ではあるまいかと氣にかかる

六三

だから、我々を御覽になつてゐる北斗星を、常に拜んで自分の間違ひを悪いことだと思つて、改めようとするのである」と、申されたので、

「尊い御身分であらせられながら、このやうに行をおつつしみなさるのであらうか。」と、成尊は只々感激して退いたといふことである。

二、藤原實頼

實頼は温和な性質で、文章の達者な人であつた。そのため、世の人々の模範であると尊敬され位もだんだん陞つて、太政大臣となつた。

實頼は自分の屋敷の南の庭に出る時には、必ず、冠を被ることを忘れなかつた。時により忘れることがあると、驚いて頭を袖で被ひながら、家に走りこんでしまつた。人が其の理由をきくと「南からは稻荷山神社が殿かに見え、私を御覽になるので、どうして敬はないでゐられませう、それにもかかはらず、冠も被らない無禮なことは出来ません」と、答へた。

實頼がなくなつた時には、身分の高い者も、賤しい者も、門前に押し寄せて来て、皆悲しんで

泣いたといふことである。

三、畠山重忠

畠山重忠は武藏國に生れ、人情深い眞面目な人であつた。源頼朝に仕へ、忠勇無双の人であつた。文治年中、伊勢の神官、員部の大領家綱は、重忠の目代（殿様の代りになつて領地を治める人―家老）が、亂暴にも神官の戸の金物を刳してしまつたと朝頼に訴へた。

頼朝は怒つて重忠の領土を召し上げ、重忠を千葉胤正の邸に監禁してしまつた。重忠はこれから七日の間、食物も食はず、又一言も口をきかずにつつしんで罪を待つてゐた。胤正はこの様子を頼朝に言上すると、頼朝も流石に驚いて、重忠を許し、召し寄せて重忠に會つた。重忠は深く罪を頼朝に謝し、居並ぶ臣達に向つて、

「領土を戴いてゐる者は、誰でもよい目代を選ばなくてはならない。私は常々心の清らかにするやうに心がけてゐたが、而し、今は心のよくない臣を信用した爲に、却つてこんな愧かしい思ひをしなければならぬ。よい見せしめである。」と、いつてさも面目なげに目を落した。頼朝は、

重忠の忠義な心持を知つて、領地を元のままに與へたけれども、只、伊勢沼田御厨だけは取り上げた。やがて、重忠は罪が全く晴れて武蔵に還ると、悪者の梶原景時は、重忠の今度の失敗を耳にし、大に喜び、頼朝に申上げるには、

「重忠はこのあひだのことを遺憾に思ひ、國に還つて謀叛をくはだてるとのことです。」と、いつた。頼朝は、結城朝光、下河邊行平をよんで、相談すると、朝光のいふには、

「重忠は、目代が悪いために暫くお咎めを受けましたが、自分で罪を負ひ、少しも怨んだ様子などはありません。重忠といふ男は、忠義一方の男で、神を敬ひ、正しいことを慕ひ、決して悪だくみをするやうなものではありません。よろしく彼をお呼びになつて、よく事情をお聞き取りになるべきです。」

と、頼朝は、實に左様だと思ひ、行平が、重忠と仲のよいのを幸ひ、行平を使として、重忠を召した。行平が行つて、そのことを告げると、重忠大に腹を立て、

「自分は何の不平があつて、長い間の功勳をすて、にはかに謀叛人となるやうなことをしようか。自分が誠心を以て公に仕へてゐることは、將軍の左右に居る人々によく知つてゐる筈であ

る。然るに今讒言人のために陥いられ、何と辯明のしようもない。君が來たのは自分を殺しに來たのであらう。」

と、刀を抜いて自殺しようとした。行平あはてて之を止め、

「君は自分を詐らめといひながら、何故人を詐りものとするのだ。誠心誠意だといふことをいへば、私だつて君にまけはしないぞ。君が將軍家の血統だといへば、自分も四代將軍の血統だ。互に正々堂々と戦つても少しも耻しいことはない。君をだまし討にするやうな人間と思ふか。」

といつた。重忠は機嫌を直して、行平に酒を勧め、ともに愉快に談じた。それから共に鎌倉にゆき、景時のところへ行つて景時に自分の心を打明けて、頼朝に謝つて貰はうとした。景時は、「君がもし本當に謀叛の志がないのなら、誓書を差し上げるがよい。」と、重忠これを聞き、

「若しも人が私を、勇氣を恃んで、財物を掠めるといふならば、私は深く愧づるばかりだ。しかし今は謀叛人の名を得たので、むしろ私の勇氣をあらはすものといつてよい。併しながら、私は源氏の興つた時にあたつて、身を幕府に委ね、未だ嘗て二心を懷いたことはない。然るにだしぬ

けに讒言をうけるのは、實に不幸である。私は心と言葉と二通りもつてをらぬから誓書などを出す必要はない。一體、誓書を出させるのは、姦者わを防ぐ爲である。然るに私の誠心に至つては、誰もよく知つてゐるのだ。このことを申し上げられたい。」

と、いつた。景時は、その通りを頼朝にいつたので、頼朝はただ黙つてをつた。やがて重忠を召し入れたが、ただ季節の挨拶をいつたばかりで、少しも謀叛をとひただすやうなことなく、そのままで事が済んだ。

第九 仁 慈

天地は生物を以て心とする。人は其の理を受けて生る。其れ故天地の心を以て心とする。人に忍びざるの心是である。此の心を擴充して事物に及ぼすを以て仁慈の道とする。苟も此の心を失つたならば、理に背き道に違ひ・自ら立つことが出来ない。誠によく仁慈であつて始めて人たり得る。故に仁は即ち人である。

易に曰く、君子仁を體すれば以て人に長たるに足る。

書に曰く、周親ありといへども、仁人に如かず。

詩に曰く、豈弟の君子は、民の父母。

大學に曰く、人の君と爲りては仁に止まる。

七〇

曰く、人の父と爲りては慈に止る。

論語に曰く、汎く衆を愛して仁に親く。

曰く、君子、仁を去つて、惡んぞ名を爲さん、君子は食を終るの間も仁に違ふことなく、造次にも必ず之に於てし、顛沛にも必ず之に於てす。

曰く、仁に當つては師に譲らず。

曰く、苟くも仁に志せば、惡しきこと無し。

書に曰く、民は常に懐くこと罔し。仁有るに懐く。

孟子に曰く、仁は人なり。

曰く、惻隱の心は仁の端なり。

曰く、仁者は敵無し。

一、野見宿禰

垂仁天皇の二十八年に倭彦命がおかくれになつた。それがため、今迄の習によつて、命のお側つきの臣を集めて、殉死させようとした。

天皇は之をお聞きになり、大變哀れに思召され、

「誰でも生きてゐたい筈なのに、わざわざ生命を棄ててまで後を追つて行かねばならぬとは誠に可哀な事ではないか、昔から遺つてゐる風習でも、どうして用ゐる必要があらう。今後はこれを止めにせよ」

と、諸々の臣に仰せられた。

其の後、皇后がおかくなつた時は、野見宿禰の意見をお用ゐになつて、土で人や物の像を作つて、それを以て殉死に代へ、長くこれを制かへとされた。さうして野見氏を土部職はしべのに任ぜられた。

二、醍醐天皇

醍醐天皇は、仁慈にして民を愛し、その生計を御考へになつた。寒さのひどい夜になると、親ら御衣を脱がせられて、下々の貧しいものはどのやうに寒いであらうとお試しになつた。大臣たちもものを申上げる時には、いつもやさしいお顔をなさつて、これをおききになつた。ある時の御言葉に、

「朕の前に來ると、誰も畏れ謹む爲に、充分に話が行届かない。その爲、どんなに臣は迷惑する事があるかも知れない。それ故朕は、對面する時は、いつも言葉やさしく、顔色を和らげて向ふのである。これは朕の意見をはつきり解られる爲である」と、有難い御言葉を申された。

三、朱雀天皇

朱雀天皇は、政治の方針を寛やかでなさけ深いことを第一とされた。諸役人は、天皇の政治があまり寛やかなので、もつと厳しくして戴けまいだらうかと、常に思つてゐた。ある時、藤原忠平が、このことを天皇に言上した。天皇には、

「否、そのことは、朕も先帝から承つてをつた。然し、朕はかういふことをきいてゐる。

「政治は琴を弾くやうなもので、大きな音のする琴を、忙しく弾けば小さい音の琴は聞えない」と、之と同じやうに、朕の政治が餘り厳しかつたなら、民は厳しさに困つて、必ず守ることが出来なくなるであらう」と、諭されたので、却つて恐縮してしまつた。忠平は、天皇の廣い御心に今更ながら感泣したといふことである。

四、加藤嘉明よしかた

七四

嘉明は、智勇兼ね備はり、家來を大へん大切にした。ある時大事な客をよんでもてなしをした
り、日頃大切にしてゐた立派な盃十個を出したのに、侍臣があやまつて、その一つを破りおどろ
き怖れて、嘉明の前に平伏して罪を待つた。嘉明はそれを聞いて侍臣を呼び、

「だれにでも過失といふものはあるものだ。そのやうに心配しなくてもよいぞ。」

と、いつて、あとの九つの盃を、みな、うちこわしてしまつた。さうしていふには、

「自分は、腹が立つからこのやうなことをしたのではない。此の器をのこしてをくと、それを見
るたびに、何年の何月何日に、何某といふものがこの一つをこわした、といつまでも忘れないで
あらう、既にこの器があるために、過失がおこつたのであるのに、更に又、そのためにいつまで
も其の者の悪い名を残すといふことは、甚だ悪いことである。それ故、今その根元を絶つてしま
ひ、又、以て自分の戒めとするのである。」

と、それから後、道具を愛することを止めた。

五、奥貞正卿おくのさだまさの

正卿は、正助といひ、友山と號し、相模國久下戸村の富農であつた。少年時代に學問を好み、
江戸に遊學し、村に歸つてから塾をひらいて子弟を教へてゐた。寛保年中、關東に洪水があつて
武藏國入間郡は最も多く害を被り、人家の水に漂ひ没したもの、數十里に亘つた。正卿は食物を
舟に乗せ、餓えた者を救ひに出た。病氣の者は舟に載せて歸り、自分の家で看病をし、其の數は
何百人といふほどであつた。正卿は、父に乞うて、

「父上が平生、私に教へて、費用を省き、儉約をおさせになりましたのは、きつと今のやうな場
合をお考へになつてのことでありませう。どうか、いまままで貯へてあるものをみな出して、救恤じゆうきつ
にあてませう。」

と、そこで、倉をひらいて、貧しい人々に施したので、集つてくるものが門前に市をなした。

正卿は、たくさん粥をつくり、下男の中で、最もつつましい人をえらんで、給仕をさせ、これ
を戒めて、

七五

「飢えてゐる人たちといつても、元來貧しい人たちではない。けつして輕んじ、あなどるやうなことがあつてはならない。」

と、正卿自らも、それらの人々を取扱ふこと、客に對するやうであつた。壯いものも、子供も一様に米を一人あて四升づつ施し、まもなく倉がからつぽになつてしまつたので、此上はと、金を出し、國々に使を出し、米を買つて來て施させたが、つひには金もつきてしまつたので、父に乞うて、田地や屋敷を質に入れて金を借り、それを以て米を買ひ人々に施した。かうして、はじめから終りまで、救つたものが四十八個村、十萬六千餘人であつた。幕府では金錢や帛^{ぬい}を賜うて其の善行を嘉賞し、村の入口にこれを表彰した。

第十 禮 讓

禮は天地自然の秩序、社會人事の規範で、讓は禮の本質根柢である。禮讓あつて始めて、天地の序全く、人事順にして、家齊^{よしの}ひ國治まる。一日でも禮讓を除いたら人々放縱に流れ、争鬭、犯亂、止むときなく、其の秩序全く亂れて忽ち野蠻に復る。互に恭敬謙遜で、其の舉措^{きそ}進退禮讓にかなつてこそ、始めて人は萬物の靈長たるに愧ぢないのである。

詩に曰く、鼠を相るに體有り、人にして禮無からんや。人にして禮無くんば、胡^{いづく}んぞすみやかに死せざる。

禮に曰く、鸚鵡能く言へども飛鳥を離れず。猩々能く言へども禽獸を離れず。今、

人にして禮なくば、能く言ふといへども、亦禽獸の心ならざらんや。

七八

曰く、凡そ人の人たる所以は禮儀なり。

曰く、人禮有れば則ち安く、禮無ければ則ち危し。

曰く、君子、人を貴びて己を賤み、人を先にして己を後にすれば、則ち民、讓に作る。

曰く、君子は、恭敬、撙節、退讓、以て禮を明かにす。

易に曰く、人道は盈つるを惡みて、謙を好みます。謙は尊くして光り、卑しくして謙ゆ可からず。

書に曰く、允に恭しく、克く讓る。

大學に曰く、一家讓なれば、一國讓に興る。

論語に曰く、恭みて禮に近づくは、恥辱に遠ざかるなり。

曰く、君子敬して失無く、人恭しくして禮有れば四海の内皆兄弟なり。

曰く、禮を知らざれば、以て立つこと無し。

曰く、能く禮讓を以て國を爲むれば、何か有らん。能く禮讓を以て國を爲めざれば、禮を如何にせん。

七九

曰く、泰伯は至徳と謂ひつべきのみ。三たび天下を以て讓る。民、得て稱するこ
と無し。

八〇

一、天智天皇

天智天皇は、始め、皇子であらせられた時、蘇我入鹿を誅したまうた。皇極天皇は、其の功を
おほめになつて、天皇の位をお傳へにならうとなさいましたが、天皇には密に奏して、御叔父孝
徳天皇に位をゆづりたまうた。

皇極天皇は、そのお心に感心なされて、つひに位を孝徳天皇にゆづり、皇子を立てて皇太子と
なし、朝廷の政を輔けしめたまうた。孝徳天皇がおかくれになつて、皇極天皇が再び踐祚したま
うた。これが齊明天皇である。天皇は尙皇太子でおいでになつた。齊明天皇がおかくれになつた
後、皇太子には白衣を着て政治をお執りになり殯宮に仕へて天皇の棺をお守りになること六年
に及び、御本葬がすんで後に御位におつきになつた。後世の歴史家は、天皇の至孝、篤讓、有れ

ども虚しきが如くし、大きな仕事をなさつても、なさつたやうな様子をお見せにならず、昔の人
のいつた、天下を有ちてしかも與らぬといふやうな讓遜な人にもひけをお取りにならぬことをお
ほめ申上げた。

二、藤原良繩

藤原良繩は、性質が非常におとなしくまた立派な心掛けの人であつた。常に孝行を盡し、天皇
の爲には命も惜しまないほどの覺悟を持つて居られた。貞觀の初め頃、正四位の下左大辨といふ
位を持つてをり、其の頃、良繩の下には、右大辨南淵年名と左中辨大江音人といふ人が居つた。

良繩は或る時に、

「私の下に居る二人とも、人にすぐれた學者であり、立派な家柄の生れであります。それなのに
私は二人に比べると年もずつと下で、然も位だけ上にあるので、顔を合せて挨拶される度に、恥
しくて冷汗が流れるやうです。そればかりでなく、私と同じ四位の左近衛の少將藤原基經などは
年が若いにもかかわらず、態度が如何にも落ついてゐて氣品があり、頭も人にすぐれてゐるので

誰しも口を揃へて感心してゐる程で、先の天皇も基經を重く用ひて、非常に信じて居られた。昔から少將四位といふ位につくものがあつた時、中將は自ら進んで身を引かるのが當然の道と聞いて居ります。私は決して昔の立派な人の通りには出来ないけれど、いつまでもかうしてゐて、私よりも偉い人の出世の道をふさいでゐることは、とても、心苦しい事であります。」

と、いひ、そして自分から病氣だといつて、人々の引止めるのを無理にことわつて、遂々中將の職を止めた。基經は中將となつた。年名も左大辨となり、音人も亦、右大辨となりそれぞれ出世した。良繩は此の時、右衛門の督となつた。

三、藤原三守

三守は、性質がおだやかでつつましく、しかも決断にとんでゐた。はやく大學に入り、五經を習ひ、官につき、右大臣にまでのぼつた。常に學者を優待し、朝、役所へ出る途中で、學生に逢ふたびに、馬を下りて通つたので、その頃の人々から大變敬はれて居た。

第十一 儉 素

人には夫々貴賤貧富の分限がある。故に身分に應じて儉約質素な生活を營むのは、天道に叶ひ幸福を享ける所以である。節制のない濫費、心まかせの奢侈は、遂に身を喪ひ家を滅ぼす原因であるから慎むべきである。併し徒に財を積むのみで、公共の爲めに散ずる道知らない者は、吝嗇と言つて、儉約とは明瞭に區別するべきである。

易に曰く、天地節して四時成る。節するに制度を以てすれば、財を傷らず、民を害はず。

書に曰く、乃の儉徳を慎み、惟れ永圖を懷ふ。

曰く、克く家に儉にす。

八四

曰く、恭儉は惟れ徳。

禮に曰く、國奢れば則ち之に示すに禮を以てす。國儉なれば則ち之に示すに禮を以てす。

論語に曰く、用を節して人を愛す。

曰く、飲食を非くして、孝を鬼神に致し、衣服を惡しくして、美を黻冕に致し、宮室卑しくして、力を溝洫に致す。

曰く、麻冕は禮なり、今。純は儉、吾、衆に従はむ。

孟子に曰く、賢君は必ず恭儉にして下を禮し、民に取るに制あり。

一、後三條天皇

後三條天皇には、もつばら儉素を尙びたまうた。そのお使いになる御扇は、檜の白木の骨に、藍紙を張つたもので、青魚の頭を炙り、唐椒をぬつたものをおあがりになり、御普請などもつめて質素になされた。後冷泉天皇の御世の末には、世の中が大へんぜいたくになつて、下吏の車でさへ、金を塗る有様であつたので、天皇は之を革めようと思召した。御即位のはじめ石清水八幡に行幸なされた。都の人々が、皆、鹵簿を拜まうと集つて來た。おつきの車の中に、金の飾をつけたものがあつたので、天皇には、御車をとどめたまひ、命じてその飾りをごとく剔ぎとらしめたまうた。その後、また賀茂に行幸なされたが、その時には、車に金の飾りをしてゐるものが一人もなかつた。天皇にはそれを御覽になつて非常に御満足なされた。のちだんだん世の中の風俗が儉約になつた。

八五

二、青砥藤綱

藤綱は、北條時頼及び時宗につづいて仕へ、數十個所の領地をもち、財に富んでゐた。身もちが至つてつつましく、着るもの、食べるものすべて粗末で、刀の鞘に漆を塗らなかつた。外出の時には、一人の家來が、木刀を持つて後についてゐた。官位を授けられるやうになつて、衛府太刀を帯びなければならぬこととなつたが、別段飾りも施さず、ただ弦袋を加へたのみであつた。ある晩のこと滑川のほとりをとほり、誤つて十錢を水に落した。藤綱にはかに從者に命じ、五十錢を以て炬をかひ、水を照らして錢を探させ、とうとうこれを見つけた。或る人が、その大變損をしたことを笑ふと、藤綱は顔をしかめて、

「お前たちが社會のことを考へてくれぬのはまことに困つたものだ。十錢の金は少いけれども、それがなくなることは、天下の寶を永久になくすことだ。私は五十錢損をしたけれどそのかはり外の人がもうけてゐる。結局合せて六十錢の金が無駄ではなかつたのだ。思へばその利益は大きいではないか。」

と、聞くもの深く感心した。

三、土井利勝

土井利勝が、或時漢絲一尺ばかりを近臣大野仁兵衛に預けて、
「大事にとつておけ。」

と命じた。或る人、其の吝嗇さ加減をいやしみ笑つたが、利勝は相手にしなかつた。それから三年の後、或日、利勝は刀の下げ緒がとけたので仁兵衛を呼び、

「先年お前に預けておいた漢絲はまだあるか。」

と、たづねると、仁兵衛はとりあはず腰袋の中からそれを取り出して、

「此の通りたしかに保存してございます。」

と、利勝の前に差出した。利勝は其の漢絲をもつて手づから下げ緒を修繕しをはると、

「無用の廢物も三年目にとうとう役立つた。」

と、満足さうにつこりした。それから、家老の寺田某を呼んで、

「仁兵衛の眞面目でよく主命を重んずるには感心した。他日必ず有用の人物になるであらうから
 祿三百石を加増してやれ。」

と、言ひ渡した。家老も突然のこと故、

「太平の世の中にさしたる手柄もないのに、三百石の御加増は甚だ御意を得ませんが、一體仁兵
 衛は何の廉かどで其の御恩典に浴するのでございますか。」

と、尋ねた。

「主命を大切に思へばこそ、三年前に預けて置いた漢絲を片時も離さず身につけて居たものであ
 らう。其の心掛けが殊勝であるからだ。」

「一尺の漢絲と三百石の祿。」

「いや一尺の漢絲とばかり言ふな。第一此の漢絲といふものは支那の産である。彼地の女達が辛
 苦して蠶かぶこを養ひ、絹絲を紡ぎ、それからそれへと幾回か商人の手を経て遙々海を渡り、始めて日
 本の地に舶來するのだ。ここでも亦それぞれ手順を経て、やつと吾々の手に入るまでの勞力と苦
 心とは實に莫大のものである。これを思へばたとへ一尺、一寸と雖もむだにするのは天の賜物を

踏みにじるに等しい。俺は常にそれを怖れるのだ。仁兵衛はよく俺の心を旨しぼとして一尺の漢絲だ
 からといつて粗略には扱はない。これはひとり利勝の命を重んじたばかりでなしに、誠によく天
 に仕ふる道に叶つたものであると思ふがどうか。」

「御尤もに存じます。それにしても、一尺の漢絲と三百石の祿。」

「さうだ。一尺の漢絲で三百石の祿を釣り上げた。仁兵衛は大物獲りの名人ぢや。」
 かう言つて利勝は又晴れやかに笑つた。

第十二 忍 耐

九〇

如何なる理想も如何なる大望も、これを達するには、種々な困難や障碍が伴ふ。よくこれを忍び、よくこれに耐へ、更によくこれに克つ者のみが遂に成功する。然らざれば中途にして廢退するのみである。たとへば谷川の水が巖を碎き山を穿ち、百年千年流れて倦まず、淀んで攪まず、末遂に大海に合して大洋の廣大を成すが如きものである。成功は忍耐の花に結ばれた美果である。忍耐の效亦偉大ではないか。

書に曰く、必ず忍ぶこと有れば、其れ乃ち濟すことあり。

論語に曰く、士は以て弘毅ならざる可からず。任重くして道遠し。仁以て己が任と爲す、亦重からずや。死して後に已む、亦遠からずや。

曰く、速ならんことを欲するなかれ。小利を見ることなかれ。速ならんことを欲すれば則ち達せず、小利を見れば大事成らず。

曰く、小、忍ばざれば、則ち大謀を亂る。

孟子に曰く、天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞し、其の體膚を餓やし、其の身を空乏し行く行く其の爲す所を拂亂す。心を動かし、性を忍び、その能はざるところを曾益する所以なり。

曰く、爲すこと有るものは、辟へば井を掘るが若し。井を掘ること九仞にして泉に及ばざれば、猶、井を棄つと爲すなり。

源頼義は、落ちつきのある上にしつかりした人で、武略に富み、大將の器量がそなはつてゐて騎射をよくした。永承年中、陸奥の國の豪族の安位頼時が反亂をおこしたので、朝廷では御相談の末、頼義を陸奥の守とし、兵をひきゐて之を征伐なさせられた。丁度その時大敵があつたので、頼時は兵を解いて降り、頼義に事へた。頼義はつひに鎮守府將軍の職を兼ねることになつた。任期が満ちて都に還らうとする時になると、頼時は、子貞任等と衣川に據つて反いた。朝廷では頼義に勅して之を討たしめた。頼義は大に頼時と戦ふこと二日に互り、頼時はつひに敗れて死んだが、その餘黨が未だ平がぬ上に、貞任の兵勢が日々に盛んで、官軍はたびたび敗れた。その年は大饑饉で、兵糧がつづかず、兵士はちりちりになり、集めようと思つても集めることが出来ない。頼義は大へん心配し、朝廷に奏上して、諸國から兵糧を徴發していただくことを願ひ、親ら兵一千八百餘人を率ゐて、貞任を河崎の柵に撃つた。たまたま大風雪で、人も馬も餓え凍死した。貞任は精兵四千餘人を率ゐ、烏海に出て官軍と戦つた。頼義はこの戦で大敗し、士卒はみな

死んでしまつて、わづかに六騎を餘すだけになつた。賊は急に之を圍み、矢が雨のやうに降つたが、頼義の子義家、藤原景通等、決死の勇をふるつて戦つたので、賊兵はつひに退却した。頼義はやつと死を免れ、

「兵糧が少しも参りませぬ、遠くからも近くからも同様であります。且つ出羽守が臣と力を協せませぬ。」

と、奏上したので、詔して出羽守を免職にされたが、新らしい出羽守が來たが、やはり賊を恐れて助けに來なかつた。その爲に貞任はますます勢盛んになり、勝手に紙幣を發行して官物を徴收したので、頼義は益々苦しみ、數年の間、敵と對峙してゐた。

その前に、頼義は二度陸奥守に任ぜられたのであるが、この時任期が盡きたので、高階經重に命じて、之に代らしめた。けれども國民は頼義を慕うて、經重を排斥したので、經重は仕方なしに還つてしまつた。頼義は、かうなつてはどうしても賊を亡ぼさなければならぬと誓ひ、人を遣はして出羽の豪族清原光頼、及び弟武則を説かせ、援兵を出させた。武則が、子弟以下一萬餘人を率ゐて來たので、頼義は自分の兵三千人を率ゐて之と併せ、進んで小松の柵を攻め、之を抜い

た。たまたま大雨がつづき十日間も進むことが出来ないのである中に、磐井から南の地ごとく賊軍に内應し官軍の糧道を断たうとしたので、頼義は一部隊を分けて之を拒がせようとした。貞任が、その兵の少いのを見て、自ら精兵八千を率ゐ、襲撃して来たところを、頼義は遠へ撃つて大に之を破り、逃げる敵を追撃して磐井川に至つた。なほ、此機をはづさず、賊の根拠を破つてしまはうと、武則をして精兵八百を率ゐ、夜、敵を追はせた。

武則は間道を進んで俄に貞任の營を襲撃したので、賊軍大に亂れ、退いて衣川の關に入つた。頼義は進んで衣川の關を攻めた。其の時雨がつづき、味方の軍は、はかばかしく勝たなかつた。武則は、ひそかに兵を遣はして賊營に火を放させたので、貞任が驚き走つたのを頼義追撃して二柵を抜き、進んで鳥海の柵を破り、又更に二柵を落して、つひに厨川の柵を圍んだ。貞任は樓櫓を築き立てて、固く守り、矢や石を雨の如く飛ばし、官軍死するもの數百人に及んだ。頼義は、人家を毀して、堀の中に投げこみ、遙かに京都を拜し、手づから火を取り、神火と名づけて堀に投じたところ、たちまち大風が起つて、敵の櫓は皆火となつた。その機をはづさず官軍が急に攻め立てたので、賊は死にも狂ひになつて戦つた。武則が、わざと城の一角の圍みを解くと

賊兵がその間からわれ勝に逃げ出した。そこを待ちかまへてゐた頼義が、片つぱしから撃つて、之を全滅させ、つひに貞任を斬つた。貞任の弟宗任は皆降参し、餘黨もことごとく平ひだ。

朝廷では、詔して、頼義を正四位下に敘し、伊豫守に任ぜられた。義家以下、それぞれに官位を賜はつた。

頼義、始めて賊を討つた時から、ここに至るまで十餘年、とうとう全く賊を滅ぼし盡した。鳥海の柵を抜いた時、武則に向ひ、

「私の顔はどんなだ。」

と、きいた。武則答へて、

「將軍には忠を天子に盡し、御身を野に暴されること十餘年、頭髮が全く白くなりましたが、今、將軍の頭を見ると、半ば黒くなりました。貞任をつかまへましたら、きつと眞黒におなりであります。」

と、いつた。頼義は大へん喜んで、つひに進んで賊を全滅させたといふことである。

二、伊藤維楨

九六

維楨は、仁齋と號し、京都の人で家は代々商人であつたが、維楨の代になつて、はじめて儒學をまなび、骨を折つて勉強した。親戚のものは之を止めて、

「儒者になるよりは、醫者になつた方が、お金になつてよい。」

と、いつたが、維楨はきき入れない。その中に貧乏がますます甚しくなり、親戚のものはいよいよ言葉をつくして之を止めたが、維楨の決心はますますかたくなるばかりである。後つひに大學者となつたのである。

ある年の暮に、餅をつくことが出来なかつた。妻が、仁齋の前に跪いて、

「家の貧しいことは、私はもとより氣にかけませんが、ただつらいのは、何も知らない子供が、よその家でお餅をつくのを見て、羨み、ほしがつてききませぬ。口では叱りますが、腸は断たれるやうに苦しうございます。」と、いつて、ほろほろと涙を流した。維楨は、机によりかかつて本を讀んでゐたが、黙つて答へず、着てゐた羽織をぬいで妻に與へた。

第十三 貞操

女子が父母の家に在るときは、男女間の交際を慎むべきは勿論であるが、女子が一旦人妻となれば、如何なる誘惑に逢つても、終身夫に對する愛を易ふべきでない。これを貞操と言ふ。柔順、溫和なども婦徳として缺くべからざるものではあるが、特に貞操を以て最大且つ最先とする。

易に曰く、其の徳を恒にするは貞。

禮に曰く、壹たび之を齊すれば、終身改めず。

詩に曰く、鬢たる彼の兩鬢は、實に維れ我が儀ひ、死に之るまで矢うて他靡から

曰く、我が心石に匪ず、轉ず可からざるなり。我が心席に匪ず、卷く可からざるなり。

論語に曰く、堅きを曰はずや、磨して磷せず。白きを曰はずや、涅して緇せず。

曰く、歳寒くして然る後に松柏の凋に後るるを知る。

一、家原音那と、紀音那

家原の音那と紀の音那の二人は女として、優しく、行ひの正しい人であつた。家原の音那は、左大臣多治比の島の妻であつた。又、紀の音那は、貯右大臣大伴の御行の妻であつた。和銅年中

に天皇は此の二人の立派な行ひをお賞めになつて、

「家原の音那、紀の音那の二人は、夫が此の世に在りし頃から、御國のために盡さなければならぬといふ道を勧め、又、夫が亡くなつて後は、夫の魂を守つて、他家へ嫁入りもせずにおゐることを、朕は深く感じてゐる。これこそ、世の人の手本となるに依つて、二人には各々五十軒づつの家を賜うようにせよ。」

と、仰せられた。

二、袈裟御前

源渡の妻袈裟は、幼名を阿都磨といつた。初め母と共に陸奥の衣川に居つたが、富豪なので、人々は衣川の殿といつた。それで、阿都磨を袈裟とよぶやうになつたのである。袈裟は姿が美しく、上西門院の雑仕となつたが、まだ笄の禮をあげぬ中に、左衛門尉源渡にとつき、夫婦の間が非常にむつまじかつた。

遠藤盛遠は、衣川の甥であるが、あの日役所の用事で外へ出、途中で一人の女を見て、その美

しさにひかれ、あとをついて行つて、はじめて渡の妻であることを知つたが、日夜忘れることが出来ず、つひに衣川の家に行き、之をおどかして自分に呉れといった。衣川は大へん驚き、怖れて、いつはり謝して、

「どうか赦してくれ、今夜來たらお前にあはせるから。」

と、いつたので、盛遠は堅く約束をして去つた。衣川は袈裟を自分の家に呼んで、短刀をさづけ、泣いて、

「はやく私を殺してくれ。」

と、いつた。袈裟は大いに驚き、

「どうなさつたのです、氣でもお狂ひになつたではありませんか。」

と、たづねた。母はくはしくそのわけを話し、

「彼の言ふことをきかなければ、きつと私を殺すでせう。彼に殺される位なら、あなたに殺される方がよい。」

と、いひ、袈裟は悲しみなげいたが、心の中で思ふには、

「子が親の身代りをするのはあたりまへのことだ。」

と、そこで母にむかひ、

「私がよいやうにいたしますから、御心配なさいませぬ。」

と、言つてなぐさめておいた。日が暮れてから、盛遠が來たので、袈裟は之を迎へ、いつはつて喜ぶふりをし、やがて席を退かうとすると、盛遠は刀を抜いて、

「お前がわしのいふことを聞かなければ、お前と渡と兩方を殺してしまふぞ。」

と、おどかした。袈裟は、

「私は決してあなたをおことわりするものではありません。ただお心を試さうとしただけです、私は、渡の家にをりますますが、氣に入らぬことが多いので、家に歸りたいとたびたび思ひますけれども、母の心にそむくことが出来ないのです、つい、ぐづぐづして今日まで居つたのです。あなたが本當に私のことを思つていらつしやるのなら、どうか渡を殺して下さい。」

と、いつた。盛遠はそれをきいて大に喜んだ。袈裟はそこで約束して、

「今夜、私は渡に髪を洗はせて休ませます。室の中に入つて、洗髪のをさがして下さいませ。」

それが渡ですから、殺して下さい。」

と、いつたので、盛遠は承知して歸つた。袈裟は渡の家に歸り、

「母が病氣だといふので、家に歸つて見ましたら、よいあんばいになほりました。今夜は心いはひに、お酒をさしあげませう。」

と、渡に酒をすすめた。渡が酔つたので、袈裟はこれを助けて寝ませ、自分の髪をぬらし、男の衣服をつけて、別の席にねてゐた。夜半に、盛遠が首を斬つて行つたが、よく見ると袈裟の首であつた。

三、靜

靜は、源義經の妻である。義經が京都を去る時、吉野まで義經のあとを追つた。義經はその不心得をさとして、下男を一人つけて路銀をも渡してやり、再び京都へ歸るやうに言ひつけた。その歸り途、靜は下男に路銀を奪はれてしまつた。置きざりにされた靜はひとり風雪の中を行き、山僧のために捕へられた。源頼朝は、これを鎌倉に呼びよせ、義經のありかをせめ問うたが、固

く知らないと述べた。其の時靜は丁度妊娠をしてゐたので、之を留めて置いたが、頼朝の妻政子は、靜が歌や舞ひを善くするといふことをきき、呼んで之を見ようとした。靜は病氣であるからといつて行かない。頼朝夫妻が、鶴岡八幡に詣つた時に、靜を呼んで舞を舞へといつた。靜は固くことはつたが、再三強ひられて起ち上り、舞臺に上つた。工藤祐經が鼓を打ち、島山重忠が銅拍子を打つと、靜は衣を整へて進み、離別の曲を唱へ、又、歌をうたつて義經を慕ふところをのべた。聽いてゐる人々は皆涙をながしたが、頼朝は顔色をかへ、

「この下素女が、わしを頌めることをしないで、謀反人を慕ふとは何ごとだ。」

と、怒り、これを殺さうとした。政子が之を諫め、かへつて細頭しやうづをあたへて舞をやめさせた。

工藤祐經が、梶原景茂等と、いつしよに靜の宿で酒を飲んだことがあつた。景茂が酔うて、靜に無禮のふるまひがあつたので、靜は怒つて泣き、

「私はもともと伊豫守に侍つたものである。伊豫守は鎌倉公の弟ではないか。お前は公の家來であるのに、私に對して何といふ無禮だ。公がもしも兄弟の道を全うせられたならば、お前などは私の顔を見ることも出来ないのだ。」と、いつたので、景茂は大に愧ぢた。

第十四 廉 潔

一〇四

凡そ人が道義を履み行はうとするならば、先づ廉潔に身を保つべきである。即ち自ら持すること清廉高潔であつて、營利に誘はれないことが必要である。苟も利慾に惑ひ、爲すべからざることを爲し、取るべからざるものを取るときは、道義全く地を拂ふやうになる、廉潔の徳がなければ子としては不孝、臣としては不忠で、功があつても暗い所があるから取るには足りない。それ故、廉潔は當に務むべき所以である。

孟子に曰く、其の義に非ざるや、其の道に非ざるや、之、祿するに天下を以てすれども顧みざるなり。繫馬千駟も視ざるなり。其の義に非ざるや、其の道に非ざるや、一介も以て人に與へず、一介も以てこれを人に取らず。

曰く、以て取るべし、以て取ることなかるべし。取れば廉を破る。

詩に曰く、岐らず、求めず、何を用てか臧からざらむ。

書に曰く、簡にして廉。

周禮に曰く、一に曰く廉善。二に曰く廉能。三に曰く廉敬。四に曰く廉正。五に曰く廉法。六に曰く廉辨。

論語に曰く、富めると貴きとは是れ人の欲する所なり。其の道を以てせずして之を得れば處らざるなり。貧しきと賤しきとは是れ人の惡むところなり。其の道を以てせずして之を得れば去らざるなり。

一〇五

曰く、不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し。

一〇六

一、阪上當道

阪上當道は、齊衡年中に右衛門の權の佐となり、檢非違使と云ふ宮中を守護する役について居つた。

當道は間違つた事の嫌ひな性質であつたので、人々の訴へごとを調べて、罪を決めるに決して不公平な事はしなかつた。權力や富貴のもののために法をかへるやうなことをしなかつた。貞觀年中、陸奥守となり、常陸權介を兼ねたが、任期が満ちて代りのものが來なかつたので、四年の間待つてゐる中に、任所で死んだ。當道は、財を輕んじて、義を重んじ、つとめにあつて、清く正しいので名高かつた。領内がよく治まつて、人民がその政治のもとに安らかに生活した。家が貧しくて、金がなく、葬ひの時にはただ蒲團が一枚あつたばかりであるが、それでゐる領地の人々は、亡くなられて後も、永く領主當道の名を惜しんで忘れなかつた。

二、天野康景

天野三郎兵衛康景は、天野遠景の後裔である。幼少の頃より徳川家康の左右に仕へ、始めは百貫の地を領した。後に駿河の興國寺城に移り、祿一萬石を賜つた。ある時、家を新築しようとしたが、しきりにその材木を盗むものがあるので、卒をして之を守らしめた。ある晩、盜賊がやつて來て見張りの卒に迫つたので、卒は刀を揮つて之を逐ひ、その一人を傷けた。調べて見ると、それは徳川氏の領民であつた。傷を負つた者が、之を代官に訴へ、

「天野の卒と争つて傷けられました。」

と、いつたので、代官井出甚介、人を以て康景に、

「徳川の御領分の民を傷けるとは不届きな奴だ、速に下手人を出せ。」

と、いはせた。康景は、

「盜賊を見つけて殺すのは當然のことである。彼のものどもは、私のところへ盗みに來た。自分で殺すことが出來なかつたのを残念に思つてゐるほどだ。わが手下の兵卒は、私の命令をうけて

盗賊の見張りをしてゐたのである。盗賊が来たから之を殺したのは至つて當然のことだ。何の罪があらう。私は決して下手人を出すことは出来ない。」

と、いつた。傷をうけたものが、之を家康に訴へたので、家康は、康景と甚介とを召して、之を訊ねると、共に前のとほりに言ひ張つて争ひが決しない。家康は、

「康景は偽をいふ男ではない。これは訴へたものの方が偽であらう。」

と、そこで代官を免職にし、ひそかに本多正純にいひつけて、康景にいはせた。

「傷けられたものは主公の御領分の民で、足下の兵卒は私の卒である。私の義を立てるために公の威光をおとすのはどういふものであらうか。」

すると康景は答へて、

「眞直なことを曲げて、曲つたことに従ふのは、私は大きらひであります。私の兵卒は賤しいものではありますが、何の罪もないのです。罪のない兵卒を殺すよりは、むしろ私が罪を引きうけて死んだ方がましです。」

と、答へて、つひに城と領地をすてて去つてしまつた。

第十五 敏

智

人の生活に智能の働程重要なものはない。智能の貴い所は事理に明敏であつて、然も其の機宜をあやまらない點にある。併し徒に速成を希ひ、巧利に走る時は、事を破り其の弊害も亦甚しい。故に忠信を本とし、道理に基いて智能を磨いてやまなければ、智能は愈々聰明となり、叡智益々冴えて、天下の事に於て享^たらないことにならう。

易に曰く、或は王事に従ふは智光大なり。

中庸に曰く、智仁勇の三つは天下の達徳なり。

曰く、學を好むは知に近し。

110

曰く、己を成すは仁なり、物を成すは知なり。

論語に曰く、智は惑はず。

曰く、一を聞いて以て十を知る。

曰く、賜や始めて與に詩をいふべきのみ、これに往くことを告げて來ることを知るものなり。

孟子に曰く、智者は知らざるることなきなり、當に務むべきをこれ急とす。

曰く、人を治めて治まらざるは、其の知に反れ。

一、船の辰爾

船の辰爾は、欽明天皇の御代に船長となつて、船の史といふ呼名を賜つた。

敏達天皇の元年に、朝鮮の高麗の國から朝廷に書信が來た。天皇は臣下の學者をお招きになつて、書信の意味をお尋ねになつたが、誰一人も解る者が居なかつた。それを辰爾はすらすらと讀んで、その意味を解いて申上げた。天皇は辰爾の頭の秀れてゐるのを感じなされて、早速宮中の役人に引立てた。それから後のこと、又高麗から書信が來た。ところがその書信といふのが、烏の羽に字を認めたもので、書いてゐる字が少しも讀みとれない。そこで辰爾はいろいろと考へた末、その羽をふかし釜で蒸して、暫らくしてから白い布を當てて上から押して見た。すると白い布の上に、字がはつきりと寫つて始めて讀み取ることが出來た。天皇はいよいよ辰爾の智慧を御賞めになつた。

二、徳川家康

一一二

徳川家康は、幼い時に、駿河の今川氏に人質となつてゐた。駿河では、端午の節句に石戦をしてあそぶならはしであつたが、見物人は、両方にわかれて、たがひに聲援をしあふのであつた。家康は十歳の時に、下男（しもやう）の肩に乗つて、石戦を見たが、一隊は三百人ばかりで、他の一隊はその半分ほどであつた。人々は争つて、多勢の方に聲援したが、家康は下男に命じて、少い方を助けさせた。下男は、怪しんでその理由をたづねると、家康のいふには、

「人数の多いものは、勢を恃んで一致しないが、すくない者は氣をしめて一所懸命になるから、勝つにきまつてゐる。」

といつた。果してその通りであつた。今川義元がこのことをきいて、

「將門將を出す（大將の家からは大將が出る）といふ謠があるが、その通りだ。」
といつた。

三、甲賀孫兵衛

甲賀孫兵衛は稻葉正登（まことり）の家臣であつた。正登の弟の式部は、時折兄の言葉にそむいて悪い事を重ねたので、遂に正登は怒つて孫兵衛に命じて、式部を斬殺させようとした。此の時孫兵衛は僅か十六歳であつたが、本當に血肉を分けた兄弟の争ひごと故、何んとかして圓滿に仲直りさせたと思つて、再三正登に頼んでみた。然し正登は孫兵衛の言葉を聞入れるどころか、

「お前ほどの意氣地なしは無い。そんな意氣地なしにはもう頼まん。外の家來に頼むから良い」と、大へんな立腹であつた。孫兵衛はそこで、

「暫らくお待ち下さい。殿様が私を意氣地なしとお思ひなら、私は改めて殿様の命令通りに、式部殿を殺すことを引受けませう。けれど殺すことが出来るかどうかは、私にも解りません故。どうか立合人を一人私と共に行かして下さい。」

とお願ひした。やがて式部の家へ行つた。孫兵衛はわざと立合人を先に立たせて、

「甲賀孫兵衛が殿様からの命令で参りました」

一一三

と、案内を乞ふた。式部は落ついで孫兵衛を迎へ、

「良く来て呉れました。私も前々から来るだらうと思つて、かうして刀を胸に押し當てて、待つて居りましたところですよ」

と、いつたが、誰か若し近づいたら、自分で腹を切るやうな覺悟の色を面に浮べて居た。流石の孫兵衛も近寄る事も出来ない。そこで孫兵衛は、急いで腰にさした刀を後の方へ投げすてて、につこり笑つて式部に近づいた。それを見ると式部もやや顔色を柔らげた。孫兵衛は靜かに式部の前に両手をついて、

「恐れながらあなたの悪い行は積り積つて、今こそ許すことは出来ません。孫兵衛、殿様の命令に従つて、あなたの一命は申受けましたぞ」

と、言ふより早く、式部に飛びかかり小刀を懐中から取り出して、今にも刺殺さうとして、

「よく見届けておいて、歸つたら殿様に申上げて私の意氣地無しであるかないかを傳へて下さ
51

と、立合人にいつた。そして式部を扶け起して、

「もうこれで裁きは終わりました。どうかあなたは此の土地を去つて下さい。私も必ずお供いたしませう。」

と、いつた。立合人も今更の如く孫兵衛の心に打たれたので、式部と共に此の地を去る事を勧めた。式部も始めて自分の罪を悔ひ改めて、孫兵衛や立合人の勧め通りにすることに決心した。やがて國を出て數年を経過して、式部は病のために此の世を去つた。殿様は、孫兵衛を國元へ召し還らせた。そして始めて孫兵衛の心の情深さに打たれ、弟式部を殺させようとした自分の行の悪かつた事をさとつた。

第十六 剛 勇

一一六

人能く剛勇なれば、事に當つて勇往邁進して、屈せず撓たまず、節義を完うするこ
とが出来ぬ。苟も怯懦なる者は道理を知ると雖も、或は利害に移されて、自持する
ことが出来ない。故に人は須く節義を鼓舞し、氣力を養成すべきである。斯くして
柔者も剛者となり、怯者も亦勇者となることが出来る。

書に曰く、剛にして虐ぎやくなし。

曰く、沈潜なるは剛克す。

易に曰く、君子以て獨立して懼おそれず。

論語に曰く、勇者は懼れず。

曰く、義を見て爲さざるは勇無きなり。

曰く、内に省みて疚いしからざれば、夫れ、何をか憂へ、何をか懼れん。

中庸に曰く、發強剛毅にして以て執ること有るに足る。

禮に曰く、儒に、親しむべくして劫おぼかすべからず、近づく可くして迫るべからず。
すべくして辱おとしかしむべからざる有り。

曰く、事に臨んで屢々斷ずるは勇なり。

一一七

孟子に曰く、自ら反みて縮ちぢからば、千萬人といへども吾れ往かん。

一一八

曰く、何をか浩然の氣と謂ふ。曰く言ひ難し。其の氣たるや、至大至剛、直を以て養うて害することなければ、則ち天地の間に塞つ。其の氣たるや、義と道とに配して、是れ無ければ餓うる也。

曰く、富貴も淫する能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、これをこれ大丈夫といふ。

一、日本武尊

日本武尊は、名を小碓と申された。一名、日本童男ヤマトノコともいつた。幼少の頃より心強く、雄々しくいきましたが、年頃になると、容貌すぐれていかめしく、身の丈は一丈あり、その力はよく鼎なべを

あげた。景行天皇の二十七年に、熊襲が反いたので、日本武尊に之を討たせられた。尊はこの時十六歳であつたが、熊襲國に至り、その形勢や地理をお探りになると、たまたま賊のかしらの川上かみ梟師たけしといふものが、その親族をまねいて酒宴をした。尊は、髪をかぶつて、少女の姿となり、劔を衣の中に藏し、ひそかにその家に入つて、婦女たちの中にまじつてをられた。梟師は一目尊を見て、喜び、そばにひきよせて酌をさせた。夜中になつて人々が皆歸つて行き、梟師が酔つて寝たところをうかがひ、尊は劔を抜いてその胸を刺された。未だ刺し殺してしまはぬ中、梟師が「お前は何者だ。」

と、いつた。

「自分は皇子日本童男である。」

と、答へると、梟師は、

「自分は強力を以て國中を威服してゐるが、未だ、皇子のやうに勇武なものを見たことがない、どうか日本武尊の名を奉らせて下さい。」

と、そこで、これを刺し殺した。これから、人々は皇子を日本武尊とよんだ。その後、弟彥等

を分けつかはして、のこつてゐる賊を殺し、熊襲がことごとく平定した。

110

二、調伊企難

調伊企難は、世に稀な程勇氣があり、人並すぐれて強い人であつた、欽明天皇の御代に朝鮮の新羅の國が日本に對して幾度となく無禮な言葉を送り寄來したので、天皇は御立腹になり、調伊企難に命じて、紀男麻呂等と共に新羅を征伐させる事になつた。伊企難は勇みに勇んで出發した。愈々新羅の國に入り二手に別れて王の城に攻め寄せて行つたが、新羅の兵は雲霞のやうに數多くて、伊企難の與かつてゐた兵は、見る見るうちに討ち破れてしまひ、遂々僅かに残つた部下と共に、伊企難は捕へられてしまつた。

新羅の王はにくにくい顔をして、伊企難を前に据ゑ新羅の國に降参したら生命は許すと言つた。伊企難は然し従ふどころではない。王はそこで大刀を引き抜き青びかりをさせてますますおどし付けたが、伊企難は刀位に驚くどころか、顔色さへ變へなかつた。王はますます腹を立ててしまひ、部下に命じて日本の國の方へ尻を向けさせ、又わざと伊企難の前で、

「日本の大將吾が膽膽を噉へ」

と、言はせた。伊企難は烈火の如く怒つた。

そこで、つかつかと新羅王の前に進んで行き、くるりと背中を向けると、天も破れんばかりの大聲で、

「新羅王吾が膽膽を噉へ」

と、叫んだ。王は無禮此の上ないと立上つて伊企難の傍に歩み寄り色々なぶり苦しめた後、部下に命じて殺させた。伊企難の息子達も、父の遺骸のそばで、勇ましく大和魂を示して殺害された。

三、濱田彌兵衛

彌兵衛は長崎の人であつた。商船に乗つて遠く海外に行き、又南洋方面などにもしばしば渡つて居たので、國々の言葉や其の國の様子などを詳しく知つてゐた。寛永中、長崎の代官末次平藏の商船が印度に行つたが、途中で臺灣海を過ぎ、オランダ人のために船貨を掠められた。平藏は

大に怒り、

一一二

「これはただ自分の耻であるばかりではない。また皇國の耻である。報復をしなくてはならぬ。」と、そのことを幕府に乞うたので、幕府は之を許した。平藏は、彌兵衛をよんで、報復のことを相談すると、彌兵衛は大にいきどほつて、之をひきうけ、弟小左衛門、子新藏及び卒數百人と共に、農夫のまねをし、蓑笠を被り、鋤鎌をもつて舟に乗り、臺灣の港にゆき守史アハヤクシにむかひ、「私たちは日本の百姓でありますが、臺灣といふ國は土地が廣く、人がすくなく、荒地が多いとききましたので、移住して開墾をしたいと思つて参りました。」

と、いつた。守吏が、そのことを甲比丹カヒタンにつげたが、甲比丹は信じない。哨船アハリボネをもつて、いく重にもこれを取り圍み、すぐ陸に上らせないので、使をよこしていはせるには、

「汝の來たのは決してよい考へではあるまい。それでなければ、なぜそのやうに多勢の人をつれて來たのか。」

そこで、彌兵衛は、

「あなたは何といふ疑ひ深いお方でせうか。もしも日本が、海外の國を攻め取らうといふなら、

かならず猛將精兵をつかはして來るでありませう。どうして私たちのやうな、つまらぬ人間を使ふのですか。」

と、いつた。守吏が、舟の中を檢査すると、ただ數十の護身用の刀と、鋤鎌などがあるばかりである。そのことをくはしく甲比丹に報告したので、甲比丹はやや安心をし、彌兵衛等の上陸をゆるした。

彌兵衛等は城に入つて、甲比丹にあひ、土地を分けて貰つて、土民になりたいと願つたが、許してくれない。それでは國に還してくれといつたが、それも許してくれない。四五ヶ月も留められてつて、何度も願つたがつひに許してくれなかつた。彌兵衛は人々に向ひ、

「甲比丹がわれわれの歸ることも、留まることも許してくれないのは、どんな心であるか分らない。男子たるものが、思ひがけないところに入つた以上、すべからず死の中に生を求めべきである。」

と、人々も亦、憤然として、そのために死なうと決心した。ある日のあけ方、彌兵衛父子兄弟三人が城に入り、外の者どもはそれに従つて、門の外に留つてゐた。三人の者は身を挺こまき、戸を

一一三

おし開けて入ると、甲比丹はまだ寢床の中にをり、驚いて、

「汝等は人の寢室に入つて來るとは何といふ無禮ものだ。」

と、叱つた。彌兵衛は大聲で叫んで、進んで甲比丹を床の上に押へつけ、懐から短刀を出し、

其の喉におしつけ、

「きさまは死んでもよい罪人であるのに、何故人の無禮を咎めるか。」

と、いつた。甲比丹の家來共が、彌兵衛を斬らうとしたが、小左衛門と新藏とが刀を抜いて遮り立ち、目を怒らして、之をどなりつけたので、家來どもはふるへて近よることが出來ない。甲

比丹はおそれおののいて、しきりに命を助けてくれと願つて止まない。彌兵衛は、

「生命が惜しいのなら、何故城の上から大砲を撃つことを止めさせないのだ。」

と、いふと、

「謹んで仰に従ひます。」

と、いつた。彌兵衛は又、

「汝が前に掠めた船貨を、倍にして返せ。」

と、いふと、甲比丹は、

「何でも仰せ通りに致します。」

と、いつた。従兵たちはこの變事をきいて、走つて來て庭に入り、敵と闘ひ、その後から來たものは、大砲に撃たれて、大分怪我をした。彌兵衛は、左手に甲比丹の臂うでをとらへ、右手に短刀をもつて、俱に起ち、小左衛門と新藏とが、其の前後を守つて外に出たが、敵の兵卒は恐れて動かない。甲比丹は、命令をつたへて大砲をうつことを止めさせ、兵卒に命じて、西洋船一隻と日本船二隻をふせさせ、それに貨物を一ぱい積ませた。彌兵衛は入つて之を檢査した上、甲比丹をとらへて共に去らうとした。甲比丹がいふのには、

「島民たちは、皆私の指圖を仰いでゐます。もしも私が行つてしまつたならば、どうしたらよいか途方にくれるであります。私は十二歳になる子がありますから、どうかそれを人質としてお伴れ下さい。」と、いつた。彌兵衛は之を許し、其の子と、頭目數人とを人質にして還り、このことを報告した。代官からそれを幕府に申上げたので、幕府は厚くこれを賞した。彌兵衛の名はそのために一時海外になりひびいた。

第十七 公 平

一二六

鏡に顔を映して美醜を争ふ者のないのは、誰に對しても私がないからである。衡に物を懸けて輕重を疑ふ者のないのは、總べてに對して差別がないからである。鏡の如く衡の如き、至公至平な心で臨んだならば、一國一家の治まらない筈がない。苟も私心あり偏頗な心で接したならば、人服せず民従はない。これを小にしては人に怨を買ひ、大にしては國に亂を生ぜしめることとなる。經世に志ある者の特に注意すべき事項である。

書に曰く、偏無く黨無く、王道蕩々たり。黨無く偏無く、王道平々たり。

曰く、公を以て私を滅ぼせば、民其れ允とし懐く。

禮に曰く、天に私覆無く、地に載無し、日月に私照無し、此の三者を奉じて、以て天下を勞す、これを三無私といふ。

曰く、大道の行はるるや、天下を公とす。賢を選び、能を與へ、信を講じ、睦を修む。故に人獨り其の親を親とせず。獨り其子を子とせず。

易に曰く、君子は以て、多きを褒し、寡きを益す、物を稱りて、施を平にす。

論語に曰く、君子は周して比せず、小人は比して周せず。

曰く、意毋く、必毋く、固毋く、我毋し。

一二七

曰く、君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず。

一一八

曰く、君子は言を以て人を擧げず、人を以て言を廢せず。

孟子に曰く、左右皆賢なりといふ、未だ可ならざるなり。諸大夫皆賢なりといふ、未だ可ならざるなり。國人皆賢なりといふ、然る後之を察し、賢なるを見て、然る後に之を用ゐよ。左右皆不可なりといふ、聽くこと忽れ、諸大夫皆不可なりといふ、聽くこと忽れ。國人皆不可なりといふ、然して後之を察し、不可なるを見て、然る後に之を去れ。

一、孝徳天皇

孝徳天皇が、御即位して間もなくのことであつた。天皇は良い朝政を行ふために、鐘と匱ぼたとを

お設けになり、詔して仰せらるるには、

「世の人々よ、若し心配事が起つた時は、伴奴（郡長）或は村長に其の心配事を訴へるが良い。然うすれば伴奴又は村長が、それを良く調べてから朕の元へ話し、宜しくその罪を裁く。又伴奴或は村長に訴へる事が出来ない時の心配事が有つたら、その時こそ書狀に書いて此の函の中へ入れられるが良い。毎朝夜の明けないうちに役人に命じて、此の函の中から取出させ、朕自らそれを開いて主だつた公卿達と相談した上で、正しく罪を決めるであらう。猶役人や遊び人がいろいろな悪い事などして、どうしても困る時は、この鐘を撞くことにするが良い」

と、擴く此のお意人民に通じる様に申された。そればかりでなく百姓が田畑を賣ることを嚴しく禁じて、百姓のために厚い同情を注がれたので、百姓は大變に有難がり、涙を流して喜んだ。

二、藤原隆資

隆資が權中納言の時、北條高時等が天皇に叛いて亂を起したので、隆資は天皇をお護りして、一先づ吉野へ逃れられた。すると間もなく北國に陣どつてゐた脇屋義助の率ゐてゐた一隊が高時

一一九

等の大軍のため惜しくも破れた。義助は逃れて吉野へと来た。天皇は早速義助を招いて非常に其の努力をお賞めになり、何くれとなく御心を注がれた。ところが權大納言藤原實世はそれを不満に思つて、

「義助は高時のために全滅にされ、身の置き場に困つて天皇の元へ逃れて來たのに、然も義助を賞めるのに、如何にも義助だけが一人で手柄を立てたかのやうにすることは、其の昔平維盛が、戦に敗れて歸つた時、天皇から特別の位を頂いたと同じことのやうだ」と、いつた。隆資はそこで

「義助が敗れて歸られたからとて、義助が弱かつたからだとはかりは言へません。自然の力が、天皇の御身をお授けしなかつたからです、朝政が良く行はれない爲でもあると思はれます。昔から大將となつて戦をする者は、非常に勢力があつて、戦をするにも大將の考へ通りに行つて居たので、大將の意のままに戦ふ事が出来ましたが、今度の北國の役などは戦ふ度に、朝廷に會議を開いて戰略を決め、それに依つて義助は唯命令通りに、家來を指圖してゐたのですから、どうして勝てる等がありません。そればかりでなく、命令を受け、家來を指圖するやうな大將のもとに

あつては、兵士も日に大將の威嚴を馬鹿にして來るものです。そしてやがては大將でありながら部下の指圖すら出來なくなつて、自然と敵のために敗れてしまひます。思へば今度の戦に敗れたからと言つて、必ずしも義助ばかりの罪ではあるまい。それを天皇はお氣づきになられて、義助の勞を慰めておやりになつたのであります。昔支那の秦の國に孟明視、西乞術、白乙丙の三人がりました。此の三人は人々の反對するのも聞かずに、遠く離れた鄭の國を攻め滅さうとしてでかけましたが、その途中晋の國のために敗られて、そのまま母國へ引上げて來ました。けれど國王穆は、決して三人の失敗を責めようとはしませんでした。此の様に天皇が今、義助を歡び迎へられたことは、實にうるはしい御心であつて、維盛の當時と同じ風に論じてはいけないことです。」

と、言つたので、流石の實世も黙つてしまひ、自分の卑しい心を改めた。

三、板倉勝重

板倉勝重は、徳川家康に仕へて居た。落ちついた心の大きい人であつた。家康が、濱松から駿府

(静岡)に移つた時、勝重を奉行に命じた。勝重は固くこれのことわつたが、家康が許さないの
で、歸つて妻と相談してからにしますといふと、家康は笑つて許した。勝重が家に歸ると、妻は
お目出度いことがあるときいて、喜んで迎へ、之を問うた。勝重は、朝服を脱いで平服にきかへ
て坐り、妻にむかひ、

「私は奉行になれとの仰せをうけたが、お前と相談してからにしようと思つて、一旦歸つてきた
のである。お前はどう思ふか。」

と、いつた。妻は驚いて、

「それは公の事で、私の關係したことでございませう。」
と、勝重は、

「いや、左様でない。昔から役人となつたもので、内謁(奥にとりいること)を以て失敗しなかつたものは少ない。今日以後、お前が私のすることに一言でも口を出さず、他からのお遺物を、一つでも受取らないといふ約束をするなら、私は役目をおひきうけしようと思ふのである。」
と、妻は、

「おいひつけの通りにいたします。」

と、いつたので、勝重は固く之を約束し、また服をかへて出かけようとした。妻が送つて出たところ、その袴のはき方がまがつてゐるので、呼び返して直さうとすると、勝重は怒つて、

「それその通りだ。何故約束に背くか。」

と、いつたので、妻は驚き恐れてあやまつた。そこで命を拜し、職についたが、訴をきくこと公平で、すべてがよく治つた。

後に勝重は京都の所司代となつた。長い間役をつとめた後、年をとつたので職を辭し、子の重宗を自分のあとに坐らせた。重宗は心をこまかに用ひ、公平廉直で大へんよくその職にあてはまつた。世間では、勝重がよくその子を知り、重宗がよく父を辱しめないことをほめた。

重宗がある時、近親のものにむかひ、

「私が訴訟をきくについて、外のものは何と批評してゐるか。」
と、きいた。問はれたものは、

「あなたはたいへんいかめしい御様子なので、言ひたいことを十分にいへないといつてをりま

す。」

と、答へた。重宗は、

「それはいけなかつた。」

と、いつて、これから後、役所に出ると、茶臼を障子の中に置き、西方を拜して後座につき、茶をひきながら訴をきき、決して障子をひらいて、訴へるものの顔を見なかつた。人が怪しんでその理由をたづねると、

「凡そ訴へを定めるのに、私の心があつてはならない。西方を拜するのは、このことを愛宕の神に誓ふのである。自分がもし私の心を以て訴へをきいたならば、神様が必ず私を殺したまふであらう。つぎに、心が静かであれば、すなはち明かであり、明かであれば、すなはちものの眞と偽りがよく分る。それ故、茶をひいて、自分の心を試すのである。茶の粉が粗くひけるか細かくひけるかは、手の疾いか遅いかによる。手の疾い遅いは、心の静であるか、さはがしいかによるのである。つぎに障子を立てておくといふことは、人の顔は一樣ではなく、善い顔をしてゐるものもあれば、悪い顔をしてゐるものもある。その顔を見て愛憎の心が起れば、自ら裁判が不公平になるであらう。それ故障子を閉ぢておくのである。」

と、重宗の職に在ることほど四十年、政平に、訴へよくをさまり、盜賊が迹をたつた。後世、役人の治績をいふものは、板倉父子を以て第一に推すのである。

第十八 度 量

一三六

心が寛大で餘裕のあることを度量と言ふ。度量が宏大なれば、善人や賢人を味方すると同時に無能の者を憐むから、衆望を得て盛徳大業を成し遂げることが出来る。故に人は努めて其の氣宇を宏大にして、眼前の小利に惑はされないことが必要である。たとへば大海の百川を呑むが如き度量を以て世に處すれば、胸中自ら餘裕綽々として、大業を成就することが出来る。

書に曰く、其の心休々として、其れ容るること有るが如し。人の技有る、己れ之れ有るが如し、人の彥聖なる、其の心之を好みし、管に其の口より出す如きのみならず、是れ能く之を容る。以て我が子孫黎民を保す。亦職として利有らんかな。

中庸に曰く、辟へば、天地の持載せざる無く、覆轉せざる無きが如し。

曰く、寛裕溫柔、以て容るること有るに足る。

論語に曰く、伯夷叔齊は舊惡を念はず、怨これを以て希なり。

曰く、君子は小知すべからずして、大受すべきなり。小人は大受すべからずして小知すべきなり。

曰く、君子、賢を尊びて衆を容れ、善を嘉して、不能を務む。

曰く、寛なれば衆を得。

一三七

一、高倉天皇

高倉天皇は、賢明仁孝であらせられた。幼少の頃、紅楓を奉つたものがあつたが、天皇は非常にお喜びになり、藤原信成にいひつけて之を守らせた。ある日、仕丁のものが、信成の留守に、その枝を剪つて薪のかはりとし、酒をあたたためて飲んでゐた。信成が歸つてこれを見つけ、非常に驚いて、仕丁をしばつた。その時、天皇が、信成に、楓の木を持つてこいと仰せられたので、信成はくはしくその出来事を申し上げ、頭を下げて罪を乞うた。天皇には、おちついて仰せられるに、

「唐詩の中に、林間に酒をあたたためて紅葉をたく、といふ句があるが、誰が仕丁に教へて、この風流をなさしめたのであらう。」

と、それきりまた、何も仰せにならなかつた。

二、酒井政親

政親は、徳川家康の家來であつた。家康が三河に居つた時に、執事となつて仕へて居た。新參の武士に神谷某といふものがあつた。或日途中で政親にあひ、禮をしたが政親は氣がつかずに行つてしまつた。その後、神谷は政親にあふたびに、無禮の振舞が多かつたので、家康は神谷の無禮を怒つて、千石を與へてゐた神谷の祿を八百石に減らしてしまつた。政親は神谷に同情して、それを増してやつて下さいといふと、家康は

「彼は、卿に對して無禮をはたらくではないか、それゆゑ、自分で引退するやうに、わざと祿をへらすのである。」

と、いつた。政親のいふには、

「臣はつまらぬものでありますが、主君のおかけをもつて、執事の役をつとめさせていたゞいてをります。それ故、主君の御家來たちは、誰あつて私の前に腰をかがめぬものがありませう。それであるのに神谷ばかりは、私の前に腰をかがめませぬ。定めし、一とほりでない人物でありませう。一旦、君の御恩に感じましたならば、よく身を忘れて忠義をいたすことと存じます。臣の見るところでは、二千石をつかはしてよいかと存じます。」

と、いつた。そこで家康は、神谷に千五百を與へ、くはしく政親のいつたことを傳へた。神谷は感泣して退き、政親のところへ行つて、あやまつた。其後、神谷は、功績があつて、歩兵の隊長となり、一かどの大將にまで出世した。

第十九 識 斷

識者は善く謀り善く斷ずる。故に大事と雖天下また成し難きものはない。明識善斷は、誠心誠意知識を明らかにし、事理を究めた結果始めて得られる所のものである。

書に曰く、惟れ克く果斷なれば乃ち後艱なし。

曰く、遠きを見るは、明を惟ふ。

易に曰く、幾は動の微、吉の先づ見はるるものなり。君子、幾を見て作す。日を終るを俟たず。

曰く、君子微を知り、彰を知り、柔を知り、剛を知る。萬夫の望。

曰く、君子は器を身に藏して、時を待つて動く。

一、藤原長方

長方は、官をかさねて權中納言に上つた。非常に強く雄々しく、何か問題が起ると、思つたままを述べて、少しも遠慮することがなかつた。平清盛が、都を福原に遷して、上下皆その不便に苦しんだ。清盛が、諸公卿をあつめ、京都と、福原と、どちらが便利かとたづねたところ、公卿たちは皆清盛にへつらつて、福原が便利だといつたが、長方は、

「いや、京都の方が便利です。」

と、反対したので、清盛は腹を立てて引込んでしまつた。人々は、長方のために心配したが、まもなく清盛は都をもとの通り京都にかへしてしまつた。或る人が長方にむかひ、

「あなたは何故太政大臣にさからひなさるのですか。」

と、きくと、

「自分で都をうつしたことを後悔してゐなければ、どうして人に訊ねるものですか。それを察しましたから、わざと反対して、都をもどすやうに導いたので。」

と、答へたので、聞くものが感心した。

清盛も亦、長方の人に秀れてゐることを知り、いつも長方を重んじ、敍位のことがあるたびに「この人はえらい人だ。他のものに超えさせてはいけない。」

と、いふのであつた。

二、北條時宗

北條時宗が鎌倉の執權となつて、國々を治めて居た時、元が宋を亡ぼし、諸隣國が皆元に従つたが、ひとり我邦ばかりは元と交通をしなかつた。元の王の忽必烈は、韓人を仲に立てて手紙を寄越し、

「従はなければ、征伐をするぞ。」

と、いつた。朝廷では、之に答へようとその手紙を鎌倉にお下しになつて、相談なされた。時宗は、其の文句が無禮であるから、返事を出してはいかぬといつた。元の使の來ること、六度に及んだが、皆追ひかへしてうけとらない。そこで元の兵一萬ばかりが來て壹岐、對島を攻めた。その報が六波羅に達したので、九州を守つてゐる大將たちに命令を下して、之を拒がせ、元の兵は敗れて走つた。その中に、元の使者が九人、長門に來て、留つて去らず、どうしても返事を得て歸らなければならぬといひはるので、時宗は之を鎌倉によび寄せ、龍の口で斬り、北條實政を以て鎮西探題となし、關東の兵をつかはして京都を守らせ、關西の兵で京都に居たものはことごとく實政に従はせ、益々太宰府の水城を築き、冗費をはぶいて、兵備にあてた。元の使者が復た太宰府に來たので、また之を斬りすてた。元の王ははなはだしく怒り、十餘萬人の大兵を、幾百艘もの船にのせ、范文虎はんぶんこをその大將として、日本を攻めさせた。敵が水城に來たが、實政等がふるひたたかひ之を拒いだので、敵はつひに岸に上ることが出来ない。退いて鷹島によつた。時宗は、宇都宮貞綱をつかはし兵を率ゐて實政を助けさせた。その援兵がまだつかぬ中に、大雷風が起り、敵艦が破れきすつた。少貳景資等はその機をはづさず、ふるひ撃つて敵兵をみなごろし

にし、屍が海をおほふまでになつた。生きて還つたものはわづかに三人。時に弘安四年七月である。元は、これから後、ふたたびわが國をうかがはなかつた。

第二十 勉 職

一四六

人の天地の間に生るる以上、上は天子より、下庶人に至るまで、凡そ職のない者はない。既に職の有る以上、一日片時と雖もこれを怠るのは天地の恩を忘れた罪人である。人各々其の職を勉めて敢へて其他を願はない時、國社會よく繁榮して、上下相共に其の景福をうける。豈天下の美事ではないか。

易に曰く、君子は終日乾乾として、夕に惕若たり。

曰く、王臣蹇蹇たり。躬の故に匪ず。

詩に曰く、黽勉事に従うて、敢て勞を告げず。

曰く、嗟々我が農夫、我が稼既に回る。上入して宮功を執れ。晝は爾于いて茅か
れ。宵は爾索綯せよ。亟に其れ屋に乗れ。其の始めて百穀を播さむ。

書に曰く、惟れ日に孜々として、敢へて逸豫することなし。

曰く、夙夜勤めざることあるなし。

曰く、業の廣きは惟れ勤む。

論語に曰く、之に居て倦むことなく、之を行ふに忠を以てす。

曰く、之に先んじ、之に勞す。益を請ふ。曰く倦むこと無し。

一四七

曰く、力を陳べ、列に就く。

一、藤原在衡

在衡は村上天皇の御代に、左大臣になつたが、役人となつてから、決して休むことをしなかつた。或初秋の日のこと、大暴風雨で天地も覆へるかと思はれるほどなので、官中に居た武士達は「今日はこんなひどいから、あの眞面目な在衡公でも多分來られまい。」

と、互に語り合つて居た。然しその話も終らない中に、蓑笠をきてやつて來るものがあるのでは誰かを見ると在衡であつた。一同はすつかり驚いてしまひ、在衡が役所に這つてしまつても、なほ感心して互にほめ合つてゐた。この勤勉なのに時の人々は皆ほめないものはなかつた。

二、源親房

親房は、官を累ねて正二位大納言にのぼつた。後醍醐天皇が、隱岐からお還りになると、從一位を授け、大臣待遇となつた。親房の子の顯家が、陸奥守と爲り、義良親王を奉じ、出でて陸奥

出羽を鎮めた時、親房がついて行き之を輔けた。足利尊氏が、京都に攻め入り、天皇が吉野に幸なされると、顯家は兵を率ゐて來り援け、安倍野で戦死したので、詔して、顯家の弟顯信を以て陸奥介鎮守府大將軍となし、義良親王を奉じて、往つて陸奥を鎮めさせた。親房は又其の輔佐となつたが、海上で暴風にあひ、親王及び顯信の船とはなればなれになり、親房の船は漂流して、常陸の東條浦についた。そこで阿波崎、神宮寺二城に據つたが、賊兵が攻めて來て之を陥れた。

親房は奔つて、小田の小田治久に依り、伊達行朝を伊佐に、藤原實寛を駒城によらせ、東北諸軍の勤王の士を招きあつめさせた。義良親王と顯信とは、還つて伊勢についたが、その時たまたま天皇がおかくれになつたので、親王が位におつきになつた。これが後村上天皇である。天皇はまだ御年がわかく、親ら政治をお執りになることが出來ないので、親房が奏請して、權大納言藤原實世、權中納言藤原隆資をして政治の仕事させた。

賊將高師冬が、駒城を攻めて之を陥れたが、やがて官軍がまた盛んになり、駒城を攻めて之を取りかへし、勝に乗つて、賊の數城をおとしたので、師冬は遁けてしまつた。親房は、陸良親王を迎へて、之を奉じた。師冬が大兵を率ゐて小田を攻めると、親房は兵を出して之を破り結城親

朝に援兵を求めたが、親朝は、賊と通じてゐるので、肝腎な時に來て援けない。そこで賊と向ひ合つてゐること數個月、治久も亦叛いて賊に降参してしまつたので、親房は退いて關城を保つた。此時源顯時が、大寶城を保つてゐたが、師冬が兵を率ゐて、此の二つの城の間に陣したので、親房と顯時とは、城を出て之を撃ち、大に敵を破つた。賊は城を還卷にして持久戦にうつつた。

これより先に、親房は、たびたび援兵のことを親朝に言つてやつたが、かうなつては城中の兵糧がなくなつて、ますます困難するので、又、手紙をやつて援を求め、使をつかはして之を諭させた。しかし、親朝はきき入れない。かへつて賊將結城直朝が、皆に先立つて進み攻めた。親房は兵を出して之を撃ち、直朝を斬り殺した。其の後に親朝はつひに賊に降つた。

そこで親房は、吉野に還つて來た。天皇には、勅して三宮（太皇太后、皇太后、皇后）と同じお取扱をなされた。天皇は男山においでになり、兵を遣はして、足利義詮を撃つて、之を走らせたまひ、親房及び子顯信をして先づ京師に入つて、諸事をとりきめさせた。後賀名生でなくなつた。

親房は深く建武中興の業が完成せず、皇統がまさに絶えさうにあることを歎き、皇祖建國の御心に推しもとづいて「神皇正統記」をあらはした。其の微れたものを明かにし、正しきものを扶けることは、まことに「春秋」の趣旨に合つてゐるといはれる。その親朝に送つた手紙の中にかういふことがかかれてゐる。

「そもそも戦争といふものは、危い仕事で、その變化はほんの呼吸をするほどの間にある。肝腎な時に、之を援けなければ、兵數がいくら多くても何の役に立たう。今日の時勢は、急なこと星の流れてゐるやうである。自分の願ふところは、この急な、わづかな時に、自分の心に守つてゐるところを失はず、わづかな命を以て先帝に報いたてまつらうといふのである。さうして大義を心にあらはし、死して後に休みたいと思ふ。私は先帝の遺したまうた老臣で今上天皇を、きはめて困難な立場に奉じ、病氣の身で大切な役目をお受けし、まさに孤城によつて、關八州をひきうけてゐる。もしも一旦、命をおとしたならば、四方の官軍は、くづれ散つてしまふであらう。親房が死んで後、志をついで事をなしとげるものは誰であらうか。今日、足下が、君に反かうといふ考へならば仕方がない。でなくて、忠義、貞節を全うしようとなされるならば、どうして、深



く慮おぼしめらなくてよからうか。天の神々も私の心を照しておいでになる。ただ天下のためにこれはいふので、わづかな命を惜しむためにいふのではない。」
歴史家はいふ、親房は、恢復の志が、百たび折れても屈せず、ひとり義兵を招き賊を討つことを己の任とし、幼帝を輔け奉つて、屹然として南朝の元老となつた。實に諸葛亮によく似てゐると。

昭和十五年十月一日 印刷
昭和十五年十月五日 發行

現代語譯 幼學網要

〔定價金八十錢〕

發行兼編輯人 東京市小石川區駕籠町八九
高山 菊次

印刷所 東京市牛込區鶴卷町二二
松榮舎印刷所
松坂 兵吉

東京市小石川區駕籠町一八九

發行所 教材社

電話大塚(86)二〇三八番
振替東京五六一四三番

終